

# 沖縄、差別も砕け

(10.25-30 関西・関東謝花祭採録集)



関東・関西沖縄解放同盟(準備会)

上原安隆さん追悼

ㄥ

あゝ、黒いヘルメット  
時速80キロで国会へ突っ込んだ  
勇士が残した  
たったひとつの、これが「言葉」だ。

国家なのだ。  
そうだ、国家は死滅しなければならぬ。  
現状がどうあれ、  
我々は、一歩でもやらねばならぬのだ。

たせ、兄弟さ。  
我々は苦しい  
あなたの死が胸をしめつけるからだ。

一人で「やらねばならぬまで」に  
あなたを追い込んだのだ  
我々を、あったことを知るからだ。

ㄥ

ㄥ

川崎は晴れていた。  
初夏の風が吹いていた。  
白い旗は線香に焼け  
ひらひらと空しい。

あゝ、兄弟さ。  
故里の夏のけだるさのまじり  
ボクの胸はキリキリと  
痛むのだ。

黒ヘルメットの銀色の傷跡が  
ボクらの臓腑を  
くさりとも突き刺しているからだ。

兄弟さ、泣かない眠れ。  
一本の線香に  
いつか、ボクらも、きっとやる決意をこめて……

(73.5.22 川崎駅)

沖繩 | 差別を砕け

目次

第一部 10・25 関西西謝花昇祭 (於 大阪・大正区沖繩會館)

司会 (崎浜盛喜)・挨拶	9
基調報告 (山城三郎)	9
講演 (新里金福)	13
池原 ハルエ	36
金城 良朗	36
本村 周広	38
宮平 良己	44
渡慶次 恒徳	45
真久田 正	47
金城 実	48
嘉陽 宗博	51
山本 一郎	52
津嘉山 政栄	53
宮平 良己	54
津嘉山 政栄	54
司会・まとめ	55
ヒヤミカチ節斉唱	

第二部 10・30 関東謝花昇祭 (於 川崎・産業文化會館)

司会 (池宮城はじめ)・挨拶	59
基調報告 (真久田 正)	60
関西沖解同(準)挨拶 (比嘉富士子)	63
講演 (新里金福) 一略	
司会・講演まとめ	64
富村 順一	66
比嘉 富士子	67
喜友里 董	69
我如古 昇	72
新田 和徳	73
徳田 博一	74
久貝 朝一	76
司会・まとめ	78
インター斉唱	
編集後記	79



沖繩「本土」のそれぞれの場所で苦闘する沖繩の兄弟姉妹のみなさん／それに大和人（やまとんちゅ）の諸君！

今まさに暮れんとする七三年の激動ほど、沖繩戦線のあらゆる思想・理論・組織を洗い出し試練にかけた年はなかった。六〇年に結成され、六〇年代を通して沖繩における政治闘争、経済闘争の全てを網羅して、その指導性と大衆性を誇ったあの「大復帰協」は今ももうない。復帰協結成の「統一気運」を背景に、糸満・那覇の首長選挙の完全共闘や立法院選の部分共闘の積み重ねの土壌に、六八年三大選挙に際して花咲いた「明るい沖繩をつくる会」Ⅱ革新共闘は実質的に機能停止に陥り凍結状態にされ永い仮眠をむさぼろうとしている。「沖繩の団結に学べ」「統一戦線の先輩、沖繩を手本に」、その沖繩は死んだ。国会の赤じゅうたんに数人の議員と知事室に「苦悶」する「ハギチブル」のマンメーを置き土産に残して、復帰協と革新共闘の両雄は瓦壊した。

ところで諸君！われわれはこれを悲しむべきだろうか。涙を一粒流してやるべきだろうか。断じて否／否である。≪破壊なくして建設なし≫の精神をわが物にしてたちむかわねばならない。そうであるなら、六五年の佐藤の訪沖を転機として、分離Ⅱ軍事支配の差別支配からむき出しの直接的な軍事支配の差別支配に、日帝の安保を媒介にした沖繩政策の大転換があったにも拘らず、あいもかわらず、民族主義と議会主義のラッパを吹きながら思想的屈服の先導を忠実に果たした、これらの既成の運動と組織の「大往生」を喜び勇んで用うことこそ道理にかなう態度としなければならぬ。腐敗したものの崩壊は大きければ大きい程良いのであり、この様な立場こそ、唯一、現在を破砕し未来を担う建設者のものなのである。沖繩の未来をわが掌に握りしめよ！

勿論、「本土」の沖繩戦線として事態は何ら変わらない。米軍の直接・全面占領から間接・半占領に移行した（?!）結果、本土も沖繩も同じ課題を共有することになったとして、冲実委と返還同盟を解散した共産党は序ノ口として、経済主義・組合主義に巧妙に装われた沖繩の部分と異なり、大日本民族主義の汚染に無自覚どころかそれに身を預けることが「革命的」と想いこみ振りかざす部分と、惨状は目を蔽わしめる。

沖解同（準）の中軸を担う、われわれ沖繩解放の熱情と気魄に燃えたぎる沖繩青年は全力をあげて、この様な状況を転覆すべく主体的にたたかう。断乎として沖繩の沖繩に「本部」を建設し、沖繩「本土」を貫流する沖解同の巨姿を登場せしめ、その過程で、われわれ自身を同化から断ちきれた、闘う沖繩人、沖繩青年として生まれかわってゆくことを目指す。

沖繩に対する差別Ⅰ軍事支配粉砕／沖繩人に対する差別抑圧支配粉砕／沖繩差別粉砕／海洋博粉砕・沖繩解放／沖解同へ結集せよ！

（付・富村氏の発言を他山の石とするため、あえて採録しました）

10

。

25

関

西

謝

花

祭

於 大阪大正区沖繩會館

△司会 崎浜盛喜▽ 後クナイビタシガ、今カラ始ミー  
ルチムエーヤイビーン。

始ミー前ニ、沖繩人ヤイビークト沖繩語サーニ話  
サンネーナイピランシガ、大和ンカイ来カラ八年ナイビ  
ークト、沖繩語ヤアマカカイ、クマカカイシ話シーグル  
サヌ大和語サーニ話スルチムエーヤイビークト許チウタ  
ビミセービル。

グスーヨー（皆さん）、沖繩が「祖国」に「復帰」し  
た72年5月15日から一ケ年半がたちました。

「返還」以前、新聞はもろろんのこと、あらゆる報道  
関係をはじめ、日本全体が「沖繩問題」一色にそまっ  
ていたの今はほとんど声がしません。

果して「沖繩問題」は終わったのか!?

我が故里では、米軍基地の金網はますます強められ、  
さらに父や母や兄弟を殺したあの日本軍は、銃剣をとき  
ずまして上陸した。田や畑は荒され、大和の資本家に安  
く買いたたかれ、青い海には油が浮かび、半島や海岸線  
は悪どい企業家に買い占められ、金網がはりめぐらされ  
ている。

こうして家を、土地を、島を追われた我が沖繩の同胞  
たちは、昭和の「さまよえる琉球人」としてさ迷い歩い  
てゐる。

関西におきましては、今年の五月、復帰一年目に、沖

繩から出稼ぎに来た前黒島さんのお母さんは、子供二人  
をかかえて入水自殺した。また、青年たちが、大阪の企  
業家にだまされて苛酷な労働をしいられたので職場から  
集団で脱走し沖繩に帰った。また、一人の女性が自殺し  
たのに何日も発見されなかったという。

さらに、集団就職で来た山口君は企業家に「廃人同様  
だ」とののしられたので、その家に火をつけ奥さんを  
殺害したとして、二度目の寒い冬を大阪拘留所の中です  
ごそうとしている……。

数え上げればきりが無い。このようなチムフトゥフト  
ウーする（腹わたがにえたぎる）悲惨な沖繩の兄弟たち  
に誰が手をさしのべたのか。

残念ながら誰もいなかったのではないか。

我々は、このチムフトゥフトウする沖繩の悲惨な歴史  
をたちきり、差別と迫害に立ちむかい沖繩の解放をなし  
とげるために今日の集会をもちました。

沖繩人一人ひとりりが沖繩人としての誇りを持ち沖繩解  
放に立ち上がる集会として成功させたいと思しますので、  
皆さん方の御協力をよろしくお願い致します。

それでは、まず最初に、山城君の方から、この集会を  
準備した経過を述べてもらいます。山城君、は。

△山城三郎▽

本日の集會に参加された沖繩出身者、ヤマトウのみならず、今、沖繩問題は何一つ解決されていません。それどころか、復帰を前後にして起った、沖繩の混乱はとどまるどころか、ますます拡大の一途をたどっています。

「基地反対」「基地撤去」「反戦復帰」「核も基地もない平和で豊かな島沖繩」と、たどりついた現在の沖繩は、ますます強化されるアジア侵略への前進基地です。

五一年に、アメリカ支配からの脱却・日本国民としての正当な当然の権利をめざして、屋良を筆頭に結成された復帰期成會、復帰運動の流れは何であり、我々沖繩人にどのような教訓を与えたのだろうか。それは階級的視点に立った、歴史の正しい判断と、沖繩問題は沖繩人自身が主体となり、率先して、担っていくべきということであろう。

復帰によってもたらされたさまざまな悪弊害は戦前にもまして、我々沖繩人を二重にも三重にも苦しめています。その一つの現われとして、沖繩農家の代表一千人が、つての戦闘的な闘う関西沖繩県人会はどこ吹く風で、それとは似ても似つかぬありさまです。

関西の現在の状況の中で、沖繩解放の熱情に燃える我々沖繩青年は、七五年海洋博以降、浮浪化するであろう沖繩人を対象に動ける組織、闘かえる組織、客観的情勢に見合った組織を創出しようではないか。そういう、関東の兄弟の呼びかけに、共に闘っていく決意を固めました。そして今日この集會を持った訳です。

## 2

以上のような沖繩―関西の現在の状況を認識した、我々関西「在住」の沖繩青年は、沖繩闘争の先輩の出席を願ひ、一〇月一日関西沖繩解放同盟準備会発足会を持ちました。

発足会では沖繩闘争の先輩たちからの積極的な意見を求めました。そこでの意見を要約すると、  
「『沖繩解放同盟』（準）を部落解放同盟の、その名に便乗して、イーカッコーしてやろうとしているんじゃないか」、  
「教員層の間では沖繩解放同盟をつくったら」と、  
「前々からあった」が、しかし、「それにジレンマを感じて出来なかった。」

「沖繩解放同盟をつくることは、いいことだ」、しかし、「具体的にこれから何を、どうやっていくか」という、「プランがなければ半年でつぶれてしまう」。

二九日から五日間東京で大行動を起す、「サトウキビ要求価格陳情団」をみれば、何よりも明らかと思えます。かつて大正末期から昭和初期へかけての、沖繩農村の疲弊は、我々沖繩人を出かせざるを得ない状況におとしこめました。そして今、又、第二の「ソテツ地獄」と形容されるような状況が生まれています。

「本土」資本の土地買ひ占め、海洋博進行によって加速度的に破壊される沖繩農村の疲弊は、かつてのそれははるかに上回るものになっています。

我々の先輩たちは「フロッキグツツミ」一つかかえて出かせぎにきました。そして「琉球人お断り」の差別の嵐の中で紡績、染色、製材工等々の職につき、同じ仕事をやるヤマトウよりも低い金で雇われました。そしてそれから我々の先輩は、とりわけ関西では阪神工業地帯の労働者の下層をなし、節約のため人のいない暗がりではゲタをぬぎ、寒い中をはだして歩くという、それこそ、イモハダシの生活を余儀なくされました。

我々関西に住む沖繩青年はそのことをよく認識しています。それは今も変わらないからです。

しかし今、それらの人たちの一部は成り上がって、地域ボスとなり、抑圧された沖繩人をさらに抑圧し、その上にあぐらをかいています。

金を払わなければ県人会に入れてやらないという、か

「沖繩の青年が立ち上がるのは大変嬉しい」、  
「教員層は頼りにならない」から、  
「若いものが中心にやってくべきだ」。というような沖繩解放同盟（準）に直接関わる意見が出されました。又、これから我々が具体的に実践的に活動していく問題に関して、我々の意見をききたいために発足会にきたという人は、「ウチの学校には、ウチナンチュの子弟が $\frac{1}{10}$ いる」。名前を聞いただけでウチナンチュの子弟とわかる。」が、「沖繩のことに全然関心がない」から、「自分ももうヤル気がない」。

「沖繩は祖国」で、「日本とたたかって、なんで沖繩の人はそこから独立せんのか」と、そのことを「小さい時分からよく考えた。」というある二世は、「沖繩の苦しみは海洋博粉砕」と「飛躍的に言っても理解できない」から、「生活基盤からの闘いをめざすべきだ」。つまり「沖繩出身者の多く居住する地区」「沖繩部落」にそこへなぜ沖繩出身者が集まらざるを得ない状況が生まれたのか、そのことを通して「我々二世は自分自身をつかみ、沖繩解放闘争に向かわなければならぬ」と。

## 3

我々沖繩青年は、沖繩解放同盟（準）という、その名が、イーカッコーであろうとなかろうと、又、その名が

大きかろうと、小さかろうと、その名にこだわり、ひけめを感じるものではない。又、沖繩人は立ち上がらない。から情民だと言って、鬨かきを放棄しようなどは毛頭思わない。沖繩人は立ち上がらないと言って、すぐにそのように認識するものでもない。立ち上がらないなら、なぜ立ち上がらないのかと、相対化する視点を我々は持っている。現在、沖繩の兄弟たちのおかれていた立場は依然として残る。ヤマトウの差別観念によって傷つけられ、苦しめられ、あるいは死に追いやられているというような状況にある。そしてそのために悩み、迷い、運動に参加できないのが大勢いる。そのような状況を我々にはなによりも、まずはじめに認識するものである。

沖繩の歴史は苦難と屈従の歴史である。これからもそれは続くであろう。しかし我々沖繩青年の誇りにかけ、沖繩解放という大義の目的をその双肩に背おい万難を排し不退転の決意で進むものです。共に頑張ろう。

(拍手)

新里金福氏講演

## 謝花昇と現代を考える

新里金福

### 1. 現代につながる謝花の問題

この会場は今日が始めてではなくて、実は去年の一月八日に反軍集会がございまして、一度来た会場で大変なつかしいんですけども、また、えにしあってここで相会うわけです。これから謝花昇について話をすることになっていますけれども、関東解放同盟の方から、大変立派なレジュメが出来ていて、これに謝花昇の歩いた道の概略が適確に把握されていると思うんで、これを参考にしたいながら、謝花昇について考えてみたいと思います。

謝花昇といえば、明治三〇年代に沖繩の自由民権運動を展開して六五年前に亡くなった人で、それこそ昔語りの対象だという印象を受けるかも知れません。しかし、

実はそうではなくて、まさに沖繩の矛盾と真向うから闘って、そして狂ってもなお妥協せず沖繩の魂を燃やして亡くなっていった人だったので。そういう意味で我々にとっても、その現に置かれている状況の中で、やはり学ぶに足りる人だろうと思うわけです。

沖繩の新聞の報ずるところによると、千人の農民が、七二年返還以降の経済的な破壊の進行の中で、異議を申し立てに、今月の二七日に沖繩で行動を起こして、それから一月の三日にかけて東京で行動するということがあります。で、それは歴史ですから、完全に繰り返すわけではありませんが、ある意味では謝花が闘ったあの歴史的背景に非常に重なり合うようなところがあるだろうと思うわけです。

と申しますのは、一八七九年(明治一二年)の琉球処分がありまして、その後琉球処分に対して、実は旧支配

層の側では大変に反対して、独立運動を展開します。それはまあ、旧支配層は、処分で自分たちの既得権を失なうわけですから、それに激しく反対したわけですけども、民衆の側は実は淡い期待を持っていたのではなからうかと思ふんです。というのは、島津と首里王府の二重搾取の中で苦しみにあえいでいた農民にとって、いずれにしても世の中が動くということ、変っていくということ、一つの望みをかけたチャンスになるわけですし、そういうような淡い望みをかけていたんです。

けれども、それがまさに幻想であったことは、その後の、つまり一八七九年以降の歴史の進みぐあいで、ありありとこれは明白になってくるわけです。というのも、沖縄県になったものの、その後の沖縄県政は旧慣温存政策で、もとのままの制度だったからです。そういうような状況の中で、農民たちはやはり自ら行動を起こして、これはもうたまらんと、とにかく旧制を、今の沖縄の制度というものを變更せよということをお願いするわけです。

これは一八九二年（明治三五年）に、沖縄の内部で運動を展開しまして、それでラチがあかなくて、けっきょくは翌年上京して、中央のジャーナリズム界にいろいろ働きかけて、沖縄の窮状を明らかにします。いわゆる旧慣温存政策というのは、その方が搾取するには効率が良いわけですから、人頭税、その他旧制度をそのまま温存

しながら、実は沖縄の人々から搾り取って、日本資本主義のいわゆる原始的蓄積に当てたわけです。

それで明治十年代に第二次の県令として就任した上杉茂憲は、北海道にあれだけの開拓資金を投じながら、何で大の日本が粟粒大の小さな沖縄から二〇万円もの国税を超過徴収しなければならぬのかと、いうようなことを中央政府に具申しまして、そのために首を飛ばされております。すぐにこれは更迭されてしまうわけです。

そういうわけで、日本政府は沖縄から明治二〇年代にすでに二〇万円の超過徴収という収奪をやっていたのですけども、そういう中で宮古の農民は闘いを展開して、そしてそれがきっかけになって、沖縄の旧税制、あるいは旧制度というものを改革しようじゃないかということになったのです。けれども実際の改革は日清戦争が終了後に回されまして、農民たちの要求が実現したのは、一九〇三年（明治三六年）でした。土地制度や税制の改革がそれです。

けれども、一九〇三年の土地改革、これが実は、ちょうど今の七二年返還と同じような構造をもっていて、農民たちの要求に応えるように表面を装いながら、実はその狙いは日本資本主義の発展のために手を打つということにすぎなかったのです。

日清戦争によって中国から三億四五〇〇万円もの賠償

金を取って、それによって資本主義の基礎をかためた日本

の権力は、その日本の資本主義がさらに発展するためには、まず低賃金労働というものが必要だったわけですから、沖縄に旧土地制度、つまり地割制というものがあって、農民が土地にしばられていて、そこから自由になることができませんので、労働力として吸収できません。そこで土地の私有制を確立して、沖縄の農民を土地の緊縛から解放して、低賃金労働力として再編する一方、土地改革にもなる税制改革によって物納の税制を本土と同じように金納制に切り換えます。こうして貨幣経済、お金の経済というものを、沖縄の社会に浸透させる。そうすることによって、沖縄の消費市場としての価値を高めたわけです。

ということは、つまり、労働市場と消費市場を日本の資本のためにつくるのが、土地改革や税制改革の狙いだったということです。しかも、ただ単にそれだけではなくて、当時沖縄の旧制度というのが、改革の第一歩を踏み出すわけですけども、しかしながら、ほんとうに本土並み、形だけではありませんけれども、本土並みになるの是一九二一年（大正一〇年）でございますんで、それまでつまり、沖縄には本土並みの制度はございません。なしくずしに、少しずつ変えてはいくんですけども、それまで、特例というものがついていて、特別な制度が数か

れる。

そういう状況の中で、当時の知事は奈良原ですけども、これが謝花昇と敵対して闘うわけけれども、奈良原繁というのは、朝鮮や台湾の総督官と同じような絶対権力を持っていたわけです。というのは、そもそも奈良原が持っていた権力とはどういうものかといえますと、だいたい予算を決定する権利は持っておりません。つまり予算決定権というものは内務省が持っていますから、したがって奈良原は持っておりませんけど、それ以外のことは、まだ沖縄には地方自治、つまり県議会という制度はありませんから、自由自在にそれこそ奈良原の思いのままに決定されたのでして、これはほんとうに専制権力と規定してよからうと思うわけです。

いかに沖縄の制度が他府県と同じような県という名前ではありながら、内容は全然本土の制度と違っていたかということ、これは、こまごまとした説明は抜きにして象徴的な話だけを拾い上げてみても明らかです。明治二八年になって日清戦争の結果、台湾が手に入るわけですけども、その時に実は『教育時論』という雑誌で、山田邦彦という教育の専門家ですけども、その人が実は台湾の支配についてどうすればいいのかという論文を書いております。その論文の中で、沖縄ではたいへん同化政策というものが成功をおさめている。したがって、台

湾の支配にあたっては、沖繩の支配を参考に同化政策の方向でいくべきで、威圧主義を用いてはならないということ、山田は述べているわけです。ということは、そもそも、台湾に沖繩の制度が似ていたというのではなくて、それは逆に、沖繩に台湾や朝鮮の植民地的な状況が似ていたということだろうと思うのです。

つまり、沖繩においてまずモデルケースとして試された一つの植民地政策というものが、成功をおさめた部分だけ台湾や朝鮮の支配にうまく取り入れられていったわけにして、ちょうどそれを暴露するような建議を奈良原がおこなっています。奈良原は足かけ一七年も沖繩に頑張っていて、その間、日清・日露という日本の国家権力にとつての非常時をことなく切り抜けて、そういう意味では、たいへん有能官僚だったろうけれども、そういうことをやって、一九〇八年（明治四十一年）に沖繩を去るわけですけれども、実は東京へ帰って、奈良原がどういふことをやったかという、東京で奈良原は次のような建議をやっています。

東京です、実は沖繩は県だなどと言うけれども、制度はむろんのこと民俗や文化や習慣その他、全然日本とは違うのだから、したがってそれを本土と一緒にしようというのは不都合である。幸いなことに台湾が手に入ったから、沖繩を台湾の属島にして、ちょうど北辺に北

海道があるように、それと対照させて南洋道というものをつくればよろしいというようなことを中央政府に奈良原は建議しております。それを見ても、本土の権力、あるいは権力の手先という者が、沖繩をどのように認識していたかが明らかだろうと思います。

そういう背景で、先程申しました土地整理が行なわれるわけですけれども、これはまあ土地の共有制を私有制にかえて、そして地租というものを確立するという、まあ、近代的な改革なんですけれども、その時奈良原は、実は、植民地官僚と同じに、沖繩の土地を次に収奪していった訳です。収奪のやり方はというと、村落の共有地をまず官有に切り換えて、そして、官有に切り換えたその土地を、今度はさらに払い下げて私有地にするのです。自分ばむろんのこと自分の腹心の部下や甥やそれから旧支配層にただ同然で払い下げる。こうして特に旧支配層を自分の手下として手なずけていったのです。

その土地収奪に対して、真向うから対立して闘ったのが、すなわち謝花だったわけにして、謝花の問題は自由民権運動の問題だとされていて、沖繩の自由民権運動と言えば、謝花ということになっておりますけれども、そもそも最初は、これは自由民権でも何でもなくて、収奪されていく農民の土地を、これはけしからん、農民の土地は農民に返せというような形で異議を申し立てた闘

いだったわけです。それは言ってみれば、非常に受動的で自然発生的な闘いだっただけです。

これが、しかしながら、いろいろ闘っていく過程で、ただそれだけではラチがあかない。先程申しましたように奈良原が絶対権力を持ってひかえていますから、齒がたたなくてそれなら中央に発言の場を求めなければならんということで、参政権獲得運動というような形になって、国政参加の運動に発展していくわけです。

後で申し上げるように謝花の運動については、いろいろ批判もありますけれども、今はまあ大里康永氏のお書きになった本に沿いながら謝花の運動に触れてみたいと思います。まず、こういう闘いを展開した謝花はどういう人でどういう経歴をたどったかといいますと、謝花昇の一生は、だいたい五つの時代に区別することができるところと思うんです。

## 2. 謝花の生涯と闘い

これは便宜上、彼のいろんな活動の過程で画期的な意味をもつ事件によって分けるわけけれども、第一期は郷里の東風平村で過ごした幼少時代。それが、やがて選抜されて沖繩の第一回県費留学生として、東京へ送られるわけですけれども、その東京で勉強したいわゆる

留学時代が第二の時期だっただろうと思うんです。その後、さらに大学を卒業して沖繩に帰ってきました、県庁で官僚として大いに活躍する時代がありますけれども、それが第三の時期だろうと思うんです。

で、この第三の時期に謝花はことごとく奈良原と対立して闘ったあげく、もう県庁の中では闘えないと県庁をやめるわけです。やめていわれる先程申し上げましたように土地の取り上げに反対という消極的な運動だけでなくて、中央における発言の場を求めて参政権運動になっていくわけですが、この民権運動に集中した沖繩倶楽部の時代ということが第四の時代としてあげられるだろうと思うんです。そして、その後運動が挫折をしまして、それから山口県に職を得て沖繩を去るわけですけれども、途中、神戸駅頭で謝花は発狂します。この発病から死ぬまでの言ってみれば運動挫折後の郷里で病を養った時代というものが、晩年というのが第五の時期だろうと思うんです。この時代区分はいわば公認のもので、特に私の独創というわけではありません。念のために、お断わりしておきます。

生まれたのはこれは慶応元年でして西暦にしますと、一八六五年です。それからまあ東京へやっていくのは一八八二年で、明治におおしますと一五年。それからほぼ十年間在京して明治二四年つまり一八九一年には沖繩へ



帰ります。それからさらに県庁へ勤めた後、県庁をやめるのは一八九八年、明治三十一年、土地改革が進行している最中です。で、それから更にまあ本土に渡って神戸駅頭で病を得て帰郷するのが一九〇一年、明治三四年といふことになりました。

先程一、〇〇〇人の沖縄の農民の大挙上京についてふれましたけれども、そこで挿入しておきますと、明治の土地取り上げの進行過程でそれに異議を唱えて闘ったのは謝花ですんで、謝花の問題はある意味で今の七二年返還協定と重なり合うのです。七二年返還政策は沖縄の政治的・経済的・社会的構造を根幹からすきおこしていく過程です。

これは海洋博にかこつけながらどんどん農民の生産手段、つまり土地を取り上げております。具体的にはこれはアメリカ軍でさえも二八年間かけて沖縄の総面積の一五パーセントしかとることができなかった。それでもあれだけの騒ぎがおこったのに、何と日本の権力と独占資本は一年たらずで六パーセントの土地を沖縄からとりあげております。米軍基地の半分に近い土地です。二八年間かかってとったものの半分近いものを一年でとりあげております。

そういうふうな土地を収奪するだけではなくて、一方ではどんどんその自ら生産した商品を自動車だとか、カケれども、伝記によれば、これは首席で通ったということになっていきます。

単に頭がよかっただけではなくて、大変謝花はスポーツも得意で学習院時代にはこれは体操の助教を勤めるようなこともやっております。そういういわば輝かしい学生時代を送って農科大学卒業の時は恩師の横井時敬博士に「謝花は沖縄の謝花ではない。日本の謝花である。だから日本にとどまって学界に雄飛するように」というようなことを言われたりもしております。しかしながら謝花は日本にとどまらず帰っております。

留学をした時、五人で出かけておりますけれども、他の四人は首里や那覇の士族階級で農民だったのは謝花だけだったんで、むしろ、農学を専攻したのは謝花だけだったわけです。それは決して偶然ではなくて、やはり明確な意識として意識されていなかったとしても、やはり彼がその当時から農民にただならぬ関心をもっていた一つの証拠としてあげることができるだろうと思うんです。そういうような形で農学を専攻した彼でしたから、彼は結局は東京にとどまらずに、東京にとどまっていれば首席でいるような有能な学業成績を残しておりますんで学界でも一流の学者として通ったでしょうけれども、彼はそれをことわって沖縄に帰ってまいります。

大里さんの伝記の中では、在京中に自由民権の指導者

ラー・テレビだとかその他もち込んで、それを売りつけることによって土地代を今度はまきあげていくわけです。そういう、土地も土地代もまきあげる過程というのは、あたかもあの土地整理、沖縄の土地改革は土地整理というのですが、その土地整理の過程で農民のためと称しながら、そうではなくて、土地を収奪していった植民地官僚、奈良原の政策に非常に似ているわけでした、もう一度申すならば、やはり謝花の闘いというのは決して過ぎ去った時代の闘いではなくして、まさに、我々の問題として今も問いつづけられている、そういう日に日にそれこそ新しくなっていく闘いであつたらうと思うわけです。

むしろ、謝花の闘いが完全な闘いだったというわけではありません。これからいろんな形で、我々は謝花の闘いを批判的に継承していかなければならないと思います。そのためにも、先程申し上げました五つの時代に区分される謝花の生涯を、今少し立ちいって検討してみたいと思います。

まず、東京での留学の時代。これはたいへん優秀な学業成績を残しております。謝花は子供のころから学業に優れていたのですけれども、学習院に入って、そこで予備的な学習をして、そして最後にはいわゆる東大の農学部の前身となる東京農科大学に入って卒業するわけです。たちと接触があつて、思想的な影響を受けたということになっております。けれども、最近、新川明さんが、書かれていろいろ事実を読みますと、それはどうも疑わしいということになっていて、そしてまたこれは確かに疑わしいかも知れません。いずれにしろ沖縄に帰ってきた時に、最初から自分は沖縄の民権の運動家として、沖縄の疎外された民権を獲得するために闘うんだという意気込みでのり込んでこなかったことだけは確かだと思つておられます。それはまあ県庁に就職いたしましたし間もなく高等官になるといふような、むしろ沖縄では最初の高等官ですけれども、そういうような言ってみれば官僚として順調な道を歩いていたわけでした、その当時の謝花は決して民権運動家として一生を送ろうなどと思つてなかつたといつてよからうと思つています。

しかし、先程申しましたように農科大学を自分だけ一人選んでいった過程にはやっぱり農民の生活、琉球処分以後のいっこうに陽の目を見ない農民の生活というものの対するただならぬ関心というものがあつて、何らかの形でそれに役立ちたいという気持ちがあつたでしょうけれども、それが政治的な民権運動というものにその段階でつながっていたかどうかが疑問だつたと思つています。

彼はその段階でそんなことを考えていたのに違ひないと思つわけけれども、自分は農業技術者なので、そう

いう技術を生かして、県庁での地位を得ながら、その地位を利用して農民の解放に少しでも役立ちたいという、言ってみれば、あれもこれもうまくいくような、自分も立身出世し、そして農民のために尽くせるという甘い考えをもっていただろうと思うんです。けれども、それがことごとく事実によって打ち砕かれていく。つまり、具体的には杣山開懇問題とか杣山処分問題というような問題がありまして、そういう問題で、それこそそういう甘い考えではとても農民のために尽くすことはできないということがわかって、彼は結局は自分の官僚としての地位を投げ捨てながら野に下って本当に農民のために尽くそうとしたのだらうと思うんです。

で、その高等官になったりした輝かしい官僚としての未来を約束されながらも華々しく活躍した時代……彼は共進会だとか砂糖審査会だとかそれから土地調査委員会、その他諸々の重要な委員会のポストにあって農民のために、やはり孤軍奮闘しております。たとえ砂糖の場合、彼は『沖繩糖業論』という糖業に関する貴重な論文を残しておりまして、そういう意味では、やはり農民のことを官僚時代もただならぬ思いをよせていただろうと思うんですけれども、先程も申しましたように、先ず杣山開懇問題で挫折をする。それから、杣山処分問題で敗北をするというようになってまいります。

もらしい看板をかかかってどんどん土地をとっているけれども、一向にそういうことはしないで、これを又貸しをしたりして、良からぬことに利用しているという事で、批判をしておりますけれども、その収奪にかかわっている者が内務次官の松岡という人物だとか、それから奈良原の甥にあたる殿木善兵衛というような男であるとはつきり名前も出してこれは追求しております。こういうふうに中央政界にまで問題になるような露骨な形で実は土地を収奪していくわけです。

それから杣山処分問題の場合は共有地をどうするかというように、結局は奈良原は官地民木という事を言っている、杣山の土地は官有地にすればいいけれども、杣山の木は民有にするから自由に使えばよろしいということも言いながら、杣山を官有に切り換えようとしています。専門家の立場からこれに対して謝花はそんなことはありえない、土地が官有になれば当然のことながら木も官有になるんで、全然農民には使えないと言って、反対するけれども、それに対して、結局は奈良原はこれはまあ政治家ですからウソをつくのが専門のような職業ですんで、うまい具合に農民の心をとらえて、自分の狙っている方向に事態を導いていくわけです。

具体的には、土地を民有にするとたいへん税金がかかって農民は苦勞する、しかしながら官有にすれば税金は

具体的にはどういうことかと申しますと、これは一八九二年（明治二五年）に奈良原が沖繩へ就任してまいりまして、その就任した年に、さっそく彼が沖繩の杣山を開懇して、食糧問題を解決すると同時に、処分によって失業している士族の職業の問題も解決しようというようにな、一見沖繩のためになるような良心的な表看板をかかげて結局は杣山開懇の問題を提示します。けれども、内実はどうなっていたかと申しますと、先程申しましたようにこれは、農村の共有地をただ同然で払い下げて士族の私有地化しながら、いわゆる旧支配層を抱きこんでいく政策だったわけです。それから一方は自分ならびに自分の腹心の部下、それから甥も入っていますけれども自分の親族などに土地を払い下げるといふようなことで、露骨な利権あさりをするといふようなことになるわけです。

これがどんなに露骨だったかを証明するために、証拠を取り上げてみたいと思うんだけど、一八九四年（明治二七年）というところはこれは日清戦争の始まる年ですけれども、その年の第六回の帝国議会で、むろん本土の人ですけれども実は木内信という衆議院議員が沖繩における杣山開懇問題をめぐる不正事件というテーマで、奈良原の土地収奪政策というものを暴露しております。

みんなその製糖関係の産業に使うとかなんとも

かからない、税金がかからないで木は自由に使えるんだからその方がいいじゃないかというように言う言いながら、結局は謝花の民地民木という主張をくつがえして自分の思う方向へもって行ってしまおうわけです。けれども、むろん土地を官有にした後で、奈良原は約束どおり木を農民たちに使わせたといふとそうではありません。それは法律上当然のことですけれども、その土地はすでに官有ですから、その土地の産物もこれは官有になるわけですから、そのために杣山から締め出された農民たちが更に杣山の木を使うために膨大なお金を出して権利を獲得するといふようなことをやっております。

具体的にはそういう悪政に対して闘いながら結局、謝花は官僚として地位を得ながら農民のために尽くそうとした最初の計画というものが、どんなに甘いものであるか思い知らされたに違いありません。そこで彼は、そういうさまざまを壁にぶつかりながら、一八九八年（明治三十一年）、この年は先程申し上げました謝花の五つの時代の第四の時代へ入る年でもあるわけですからけれども、この年に上京して初の政党内閣だった大隈内閣に、奈良原の暴政を訴えて、その奈良原を更迭するという約束、これは板垣内務大臣からとりつけるということまでしております。

それで、まあ新しい県知事としては嘉悦氏房にする

いう人選まで決まっていたところ、これは御承知のように大隈内閣はすぐにいわゆる藩閥勢力によって転覆されてしまいますんで、奈良原更迭の計画は実現しないまま結局は消え去ってしまおう。で、そういう状況で、謝花が沖繩へかえってみたら、更迭の話は奈良原の耳にも達している、謝花はともて県庁におれないような状態にされてしまおうわけです。

いろんな形で謝花は奈良原にいびられますけれども、いびられて謝花は結局その年の一月二月に自ら県庁を去って、そして先程申しました沖繩倶楽部を組織しまして、『沖繩時論』という機関紙を出して、それを牙城に奈良原の暴政を暴露しながら闘いを決していくわけです。そして同時に先程申しましたように、ただ単に土地取り上げ反対だけではこれはラチがあかないということで、謝花の場合、当時沖繩では凍結されていた国政参加を実現しようというので、参政権獲得という方向へ闘いのホコ先を向けていきます。

けれども、実は参政権獲得というものはたいへん長い期間闘われたような印象を我々ももっているけれども、これは実は短い闘いでして一八九九年（明治三二年）から一九〇〇年（三三年）にかけての実質的には二ケ年だけの闘いでした。その間に二五巻まで『沖繩時論』を出しておりす。現在その現物はどこにいったか散逸して

見ることができません。けれども、いずれにしても八時論Vを牙城にしながら、結局は旧支配層の言論の根城であった『琉球新報』とわたりあったわけです。

その間、県庁を去った謝花に対して奈良原はだまって見ていたかというところではなくて、参政権獲得のために上京すれば、そっちの方に暴力団をさし向けて、そして日本刀で切りつけさせるというようなことをやっております。

ちょっと横道にそれるかも知れませんが、そういう事態の中で、彼のそれこそ兄弟分として闘った当山久三が、例の生命知らずの男でしたし、それから無欲な男だったので、鹿児島からやってきた郡長と意見があわなくなると、当時月給一四円という高給の金武村の小学校の校長のポストを投げすてて、月俸四円の並里の総代に転じて闘うとかということをしております。それから又、自分の理論的限界を自覚して、勉学のために上京していったあと、東京でやっと見つけて淀橋小学校の校長となるわけです。数え年三十歳の時でした。その若さで、東京で、それだけの地位を得ることは、これは沖繩人としては異例のことだったので。けども、謝花が上京してきて、沖繩の窮状を訴えると惜しげもなくその校長のポストを投げすてて沖繩へさっさと引き返して行って、結局は自由民権運動を闘うのです。

そんな無欲で青竹を割ったような男でしたから、当山は暴力団に謝花が襲われた時は、謝花と暴力団の間へ突き進んで行って、沖繩男児を切れるものなら切ってみろと胸をはだけて立ちふさがったので、恐れをなして暴力団は結局は切れないままひきさがったというエピソードも残されておりす。隣の部屋にいて、様子を聞きつけて、その部屋のフスマを蹴破って出て来たということになっておりすけれども、そういう一幕もあるというように、暴力団とかかわりながら闘いを続けるわけです。それが結局は謝花の場合は後年、神戸駅頭で発狂する遠因をなしていたという説も伝えられております。

一方、沖繩の方では財政的には南陽社というものがございまして、印刷だとか、それから農業関係の器具や肥料などを扱う商社ですけれども、そこで闘争資金をかせぎながら、闘っていますけれども、いろんな形で、いわゆる沖繩の大家と謝花たちとを分離するために密偵ースパイみたいなのを放って奈良原はいやがらせをさせて、そういう経営をダメにするようにしています。

まあ、あれこれのことがあって、二ケ年間、充実した闘いではあったけれども、その後一九〇一年（明治三四年）になると、その頃から闘いも息が続かなくなる。まず、第一に財政的に困難におちいって、その後結局は、同志たちが一人へり、二人へり、去っていく中で、彼は

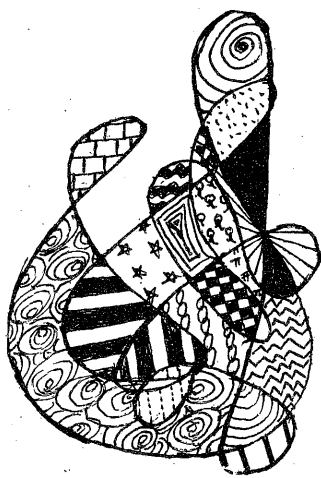
当然のことながら、奈良原の支配している沖繩で就職するあてもないまま、山口県の県庁に就職するために、本土へ再び渡ります。

ということは先程も言ったように、謝花は単なる沖繩の謝花ではない、日本の謝花だ、日本へ帰って学界に雄飛せよ、という恩師の言葉まで、ことわって、沖繩のために働くつもりで帰った謝花が、結局は闘いに破れて、それこそ、矢がつきで、一度捨てた日本へ再び舞いもどったわけです。彼の気持ちはただならぬものがあったらうと思っております。

そこで、結局は山口へ行く途中、神戸駅頭で、発病して、それ以後八年間ばかりは、それこそ、生ける屍として、先程いった第五の時期、挫折後の病いを養った晩年をすごすわけです。しかしながら、その気の狂ってしまった謝花が、実は抵抗の精神だけは生き生きと残っていて、その八年間というもの天気さえよければ、自分のふるさとの東風平村の辻に出まして、自分の憎い敵であるそして、天皇制家族国家の出先機関の頭目でもある、奈良原の名前を大書して、学校の行き帰りの子供たちにこれを踏ませて、抵抗の教育を実践したと伝えられております。

そのエピソードに、すでに謝花の深くやしき、激しい闘いの魂というものがとどまっているだろうと思うん

ですけれども、で、非常に象徴的なことは一九〇八年つまり、明治四一年の四月に実は、奈良原は一七年間の最後の琉球王と陰口を言われるような専制政治を行って、沖繩を去るわけですけれども、その奈良原が去ったところを見とどけて、謝花は同じ年の10月29日に息をひきとっておりませう。この死に様はけっして偶然ではなかったであろうと思います。奈良原が去って、一人安心して、死ぬことができたんだらうと思います。



### 3. 闘いの挫折した原因

しかしながら、いずれにしても、これは最後は挫折をし、惨敗した闘いだっただらうと思ひんで、それがいったいどこから来たのだらうかということ、少しばかり考えてみたくです。いままでもなく、奈良原という植民地総督官相当の権力を持った、そういう専制政治家というものが、沖繩で頑張っていた、つまり、そういう形で、日本の新支配層というのは、沖繩に臨んでいたということが、ひとつ、理由としてあるだらうと思ひんで、それはまあ、今までの話して明らかだらうと思ひんですけれども、それと同時に、もう一つの要因として、やはり、旧支配層というものが、ことごとくに、謝花をいびったということがあるだらうと思ひます。つまり、沖繩の間人でありながら謝花の闘いに手を貸すんじゃない、奈良原の、権力の側に尻尾をふって、まあ、奈良原と一緒に謝花をいびり殺したというのが、これが、旧支配層のいつわらざるあり様だったと思ひんです。

沖繩の旧支配層というのは、これは特殊な存在で、いわゆる琉球処分が行われた後も、これは旧慣温存政策と申しまして、沖繩では全然、近代的な政策はとらないで、もとのままの制度を残していますから、そういうわけで、

旧支配層も残存していたんだけど、これが、日清戦争で、日本の国家権力は戦争に勝ちながら、それでもなおかつ、旧支配層というものを排除することをしませんでした。

これは意識的な政策展開でしてほとんどの植民地で、日本だけではなく、ヨーロッパ、アメリカの植民地でも同じように展開された一つの植民地政策のパターンでした。つまり植民地の近代化を、人的におしとどめておいて、その凍結された後進地域としての遅れを利用して、原料を安く買ったり、それから労働力を安く利用したというようなことをやるわけです。それが沖繩でも同じように展開されていたということにして、そういうわけで旧慣温存政策というのが展開されたんだけど、その旧慣温存政策の中で、結局は旧支配層も温存され、そして、日清戦争以降は、さらに再編されて、いわば買弁階級として、日本「本土」の権力の手先としての役割を演じていくわけです。

そんなことを言っても、事実無根じゃないか、という反論があらましようから、具体的な事実をあげますならば、日清戦争の終ったあくる年、つまり、一八九五年に、実は旧支配層が、公同会の運動というものを起こしております。明治二九年から三〇年にかけて、運動を展開しております。これはどういふことかといひます

と、いわゆる一般的には復藩運動と称されており、もう一度、沖繩に藩をつくりたいという申し入れを日本政府にやったということになっています。しかしながらよくよく、その時の趣意書を読みますと、これは決して復藩運動ではなくて、私の言葉でいえば、買弁志願の運動だったんじゃないかと思ひます。

たいへん長い文章だけれども趣意書の本意をここで要約してみますと、目下沖繩で一番大事なのは沖繩の人々を日本国民として、順化することである。要約するならば、沖繩の人々を内地人と同じように同化することである。というような言葉を使っております。

しかしながら、沖繩は特殊な歴史をもってきたんで、本土の権力が直接支配し、同化しようとしても、これはむつかしからうから、したがって、事情に明るい沖繩の旧支配層をはさんで、間接支配をした方が、非常に効率のいい、同化政策というのが展開され、そして、一旦緩急の時、沖繩人が国のために忠良なる臣民になるであろうというような趣意書を書いてあるわけです。

これは明らかに、日清戦争という事態の中で日本の権力が、勝ったわけですから、そういう新しく流動化していく状況の中で、何らかの形で、自らも地位を獲得していきたい、そのための一つの試案として、いわば、古い尚家の人々を世襲の県知事にすえたらどうかというよう

な案を出しただろうと思われるんです。むろん、これを日本の権力は許しませんでした、その後、しかしながら、優遇措置を意識的にとっておきます。

それはいろんな形で旧支配層たちが返り咲くわけだけれども、返り咲きの具合をここで、ちょっと紹介しますと、例えば、尚順が公会運動の後から、広運社の社長になるとか、それから高嶺朝教これは旧支配層で、第一回県費留学生として、謝花と一諸に東京に行った人ですけれども、この人が沖繩銀行の頭取になるとか、それから、これは尚家のお婿さんなんだけれども獲得久朝惟という人が沖繩食糧株式会社の社長になるとか、それから太田朝敷、これは第一回県費留学生の一人で、琉球新報の創設者でもあるんですが、この人が沖繩砂糖会社の社長になる。

琉球新報は、実はすでに日清戦争の直前の一八九三年（明治二十六年）に創設して、ちゃんと世論の操作に乗り出してあります。お金はかなり奈良原が出しておりますので、そこいらへんで、すでに新権力と旧支配層の、ゆ着が始まっていたんだけど、しかも、当時琉球新報の幹部だった太田が、こんどは、沖繩砂糖会社の社長になるというような形で旧支配層たちが、まるで雨後のタケノコのように財界を全部占めていった。

むろん、すでに日清戦争の前に沖繩にたつた一つしか

なかった、この琉球新報という言論機関は旧支配層によって独占されておりまして、そういう言論界も財界も、まあ独占されて、それこそ、旧支配層はカ、バンも看板も両方とも持ったわけです。したがって沖繩のいるんな選挙戦においては旧支配層がほとんどみんな勝利して、出てくるわけです。第一回の県会議員の選挙の時には高嶺朝教が当選して、そして、県会議長になるとか、それから国会議員の選挙の時は高嶺と、それから、岸本賀昌という旧士族が当選して、議席を独占するということになるのです。

したがって、そこまですればそれこそ、政界も旧支配層に独占されるわけですし、言論界、経済界、政界、三つの世界を結局は旧支配層に独占されたまま、それこそずっと、こん度の戦争で敗れるまで、そのような状態が尾を引くわけです。そういうような形で、優遇措置をとりにながら、一方においては先程申しましたように、沖繩の共有地というものをどんどん払い下げて手はずけていくのです。そして、ついでに自分の腹心の部下や、自分の取り分も取っておく。そんな訳で奈良原というのは、これは本土で大日本鉄道会社の初代の総裁だったので、そういう鉄道の専門家として、日清戦争の時に台湾が手に入ったら台湾に鉄道が敷設される事を予見して、自

分の所有としております。

むろん自分の名前でやると露骨ですので、先程、国会で問題になった殿木善兵衛ですけども、その人物の名前で取りあげていて、それこそ台湾に鉄道が敷設された時には、その殿木善兵衛の名義にしてあった中山の木をボカスカ切って売り飛ばして、これは財を築いたと伝えられております。そういう状況の中で、結局旧支配層はエサを与えられて、いつてみれば尻尾を振る犬になってしまったんで、それからというものは、奈良原の片腕になって謝花の自由民権運動をいびりながら思想的にも墮落していく。

どういふ風に墮落していくかと言いますと、いわゆる旧支配層たちは、公会の趣意書で、同化こそ沖繩を治めるための緊急の一大事である。その同化を先ず推進するために我々がいくらでもお手伝いしましょうというところを、書いてあったわけだけれども、その後、エサを与えられながら結局はどんどん同化の進軍ラッパを吹くようになって、一八九八年（明治三十一年）に徴兵制が施行された時は、大いに忠君愛國をうたいあげて、沖繩の間がこれで初めて日本国民の一人前の仲間入りが出来たといつて万才を唱えております。

そして更に一九〇〇年（明治三十三年）になりまして、例の、沖繩の人々は内地人をすべての点で見習うべきだ、

極言すればクシヤの仕方も内地人を見習うべし、という様なことを琉球新報で書いて、極端な同化の尖兵となる訳ですけれども、これが、それから三年後の一九〇三年（明治三十六年）には思想的な破産を露呈するのです。「人類館事件」といって、場所は大阪ですけれども、そこで第五回勸業博覧会が行なわれて、その人類館と称する所に小屋がけて人類学の生きたサンプルを「かざって」あつたそうです。そのサンプルは何だったかというところ、それは朝鮮の人と北海道のアイヌと台湾の高砂族と、それから琉球の女性二人、つまり四種のサンプルを並べて、こいつらは、こいつらは、とまるで化石を説明するかのやうにその人類館の中で人類学の説明をしていて、通りがかりの沖繩の人が、それは許せぬというので琉球新報に投書したところ、地元の沖繩の人々が次々に抗議の投書を寄せる。それが連日掲げられる。そして新聞自体も態度を明らかにしなければならなくなって、抗議の論説を書くわけです。

その中で、沖繩の人々をこいう扱いしたのは心外であると述べます。確かにその通りです。私もその通りだと思います。しかしながら理由がいけないのであります。これもあろうに沖繩の人を、北海道のアイヌや台湾の生蕃の如きと（生蕃と書いてあります）一緒にするとは心外であると言っているわけですし、尽きるところ同化

の線に沿いながら自らを解放しようとした試みというのは、こいう排外主義的なナショナリズムにならざるを得なかつただろうと思つて、これはまさに思想的な破綻だつたといわざるを得ません。自分さえ良ければ他の者はどうでもよいという発想は尽きるところ自分も解放しないということが、話をとばしていうならば、今次大戦で証明されただろうと思つておきます。

こいうふうにして沖繩の人々は同化の線に沿いながら、忠良な臣民になることによつて、自分の体制内の地位を引き上げようと試みていたけれども、特に旧支配層を中心とする人々によつて、或は、これと対応する沖繩学の人々によつて、こいうやうな運動の方向が生み出されていったわけけれども、これは尽きるところ排外的な民族主義として、単にアイヌや高砂族その他アジアの人々を不幸に突き落としただけでなく、自らもそれこそ国防の楯となつて、沖繩と沖繩の人々を戦禍に蹂躪させる結果になつただろうと思つて、むしろその場合戦争を指導した帝国主義者、当の日本の権力に対して糾弾する視点を失なうことは誤りですけれども、同時に内側で、もし公同会の運動を展開した旧支配層のような形で、沖繩の解放路線を構想するならば、尽きるところ自分の首をしめる結果になるだろうという、そのことは既に歴史の事実によつて結論が出されているだろうと思つ

んです。

こいうやうな事態として展開していく過程で、ことごとくに民権運動と旧支配層が対立し、従つて謝花は、本土の権力と闘うだけじゃなくて、沖繩の内部の旧支配層とも闘わなくちゃならない、それこそ腹背に敵を受けた非常に困難な闘いを展開しました。しかも、明治三十年代に沖繩で自由民権運動が展開されるわけけれども、既にその時点には、自由民権運動を本土で展開した人々は内閣でポストを得たりして、それこそほとんど体制の中へ吸収されていくわけです。つまり転回していつちやつたわけですから、それこそ孤立無援の中で誰の援助も受けないうで、謝花の闘いはさつきあげた二つの敵と闘つた闘いであつただろうと思つておきます。

こいうやうな闘いのために、彼の闘いはいろんな問題を含んでいるわけですが、いづれにしろ先程申しましたやうに謝花の闘いは、むしろ完璧なものであるわけがありません。人間ですからいろんな欠点もありまして、運動にも限界もあるし、こいうやうな最近、謝花批判というの一方では起つていてそれを代表するのが沖繩タイムスの記者の新川明さんだろうと思つておきます。新川さんの批判は様々な形で展開されているけれども、重要なポイントを二・三あげてみますと例えば謝花が左遷されるわけです。仙山開墾の時に担当の吏員だつたんだ

けれども、彼はまもなく首里の方の人々が払い下げを申請したところ、それを拒否して、その後奈良原によつて左遷されているのだけれども、これは実際は、農民の立場に立つて闘つたから謝花は左遷されたのではなくて、むしろ泉当局の墾墾政策の推進者としてそれこそ勇み足になつて余りにも戦闘的に墾墾政策のお先棒をかついだんで、農民とトラブルを起こしてそれが原因で彼は左遷されたんだといふことを新川さんは主張しておられます。

その根拠として新川さんは、琉球新報の記事を取りあげておられますけれども、成程琉球新報にはこいうことが書かれております。しかしながら、琉球新報がその前後に書きたいろんな記事を含めてその全体の文脈でその記事を抱えるなら、これは明らかに中傷記事でして、当時敵対して闘つていた当の琉球新報ですから、あることないこと書きたてて、結局沖繩の人民と謝花たちとの分離工作をするわけです。沖繩の人民が彼について闘いが大きく広がっていくことを恐がるのです。

で、こような中傷記事の具体的な例としては、たとえば民権運動で上京した時は、事実無根なのに、実は謝花は土地整理を遅らせる運動をするために上京したなどと書いておられます。これはウソです。「沖繩時論」で土地整理の早期実現を謝花たちは主張していたからです。それから更に、北部に、民地民木論で奈良原にだまされた

らいかんということを遊説に行くと、あれは闘争資金がなくなつて、そのために沖繩の人のいい農民をだましてお金をちょろまかしに行っているんだと書きたてております。今だったら名誉毀損で起訴できるような大変な人身攻撃で、事実無根の中傷記事を書いて、ほんとにこれが新聞記事かと思われる程です。そういう文脈の中で、まあ敵を中傷する記事として、先程ふれた左遷に関する記事も書かれてるんで、私は、これを根拠に新川さんのような判断を導き出すのは正当ではないと思います。で、参政権のことについても、これは沖繩の場合、最初特例づきでして、先島を除く沖繩本島と周辺の島々から二人だけ衆議院議員を選ぶということになるわけですが、二人だけ衆議院議員を選ぶということになるわけですが、明治四五年、つまり一九一二年ですが、この時に到つてこの特例づきの選挙法が沖繩に実施されるんですけども、それもまた、これは謝花が実はこういう運動をしたというわけです。謝花がそういう運動をした理由は、本土並みの数の議員を選出すれば、これは国政参加の時期が遅れるという計算もあって、実は先程の護得久だけれども、その護得久とそれから謝花の二人が沖繩から国会に参加すればいいんで、まあ二人で結構だ、そのためには先島は除いてもいいと、そういうふうに言ったという事になっております。

その根拠はといえば、仲吉良光、これは毎日新聞の記事もひいたり、一緒に寝たりもするというような、本當に肌を接した暮しだったのに対して、どうも今まで知られた事実の中では、謝花の場合は、回りにインテリゲンチヤだけを集めたという気配が多いんで、彼の回りには確かにインテリゲンチヤはいただけれども、ほんとに手を汚して働いた農民はあまりいなかったんではないかというような印象も受けます。

それともう一つ、宮古の農民運動は、先程申し上げましたように、一八九二年（明治二五年）頃から、沖繩の中で展開されていて、九三年（明治二六年）には、ラチがあかなくて中央へ訴えに行くわけだけれども、そういうような困難な闘いを展開していた中で、どうもその宮古の闘いに謝花が手をかけた形跡は今のところ一つもありません。その当時、先程も言ったように、やっぱりある意味では県庁の中で立身出世をして、そのポストを利用しながら、何らかの形で農民のために手をかそうという甘い気持ちでいたというふうに推量しても、そう見当違いではないだろう思うわけです。

そういう点では、むしろ当山が、たとえばまず農民の生活というのを優先させて、具体的な移民運動という形で、まず制度改革よりも農民の衣食住の問題というわけで、外側に闘うエネルギーをそらしていったという批判もあるけれども、そうした現実主義の対極における理想

者にもなり、あるいは沖繩の現地の新聞記者としても長く勤めた人ですけれども、今も健在で、那覇に在任しておられるんですが、その方が昔、護得久さんに聞いた話を、最近になって、二・三年前ですけれども、琉球新報で昔語りを書いた記事を根拠にしているわけで、これまた証拠としては、はなはだ希薄だろうと思つてます。

しかしながらいざいざにしても、謝花の闘いが完璧じゃなかったことは、これはまあ当然のこととして、先程も申しましたように、二つの敵を相手に闘うという困難な状況、それから本土の民権運動が権力に吸収されて、もう闘っていないなかつた状況の中で、孤立無援の闘いをしたというように、さまざま困難の中で闘っていて、その中で決して、最後まで謝花は転向しなかつた。

むろん、山口県庁に就職していつたということ自体が、一つの転向じゃないかという見方はあるんだろうけども、そこまで見るのは酷でして、まあ思想的には謝花は転向しなかつたわけで、そのように最後まで闘いえたというのは、これはやはり沖繩の闘い魂の輝かしい証しとして、われわれ沖繩人の仰ぐに値する実績だろうと思つてます。むろん彼が、農民との関わりにおいて、非常に薄い面があつたということは指摘されてよからうと思つたわけで、たとえばまあ、当山久三が、農民たちと一緒に自らくわをふるって開墾小屋の中で酒を飲み、話もうたい、三昧

主義に謝花は殉じていつたと規定していいかと思つてます。

しかし、それが一方においては、農民の生活からはやや遠いところにいたということだと思つて、しかしながら、彼はいろんな形で闘って、県庁の中で奈良原とほんとに対立して壁にぶつかりながら、地位をすてて県庁を去るのか、それとも県庁にとどまって立身出世のコースをたどるか、この二者択一に直面した時、彼はまだ妥協する余地がありましたし、彼は優秀な技師だったし、だから、県庁で価値ある存在でもあつたわけだから、地位を得ていこうとすれば自由にそれも得られたわけだけれども、最後の二者択一の中で、やっぱり彼が地位をすてて、自分から野に下つていったということは、これは謝花を考ふる上で、注目してよからうと思つたわけです。こんなことで謝花個人については今にわかに結論めいたことは言えませんが、最後に謝花の問題も含めて沖繩のいろんな闘いの歴史や、それから沖繩の伝統的精神風土について考ふる上で、一つの問題点みたいな話をお話して、私の話を終りたいと思います。

#### 4. 問題を考ふる原理的視点

沖繩の明治以降の歴史は先程も言ったように県制とはいいながら、これは内実において非常に植民地的な性格



のもので、まあそういうことについて、今までいろいろと申し上げてきたんだけれども、たとえば山田邦彦の問題だとか、それから奈良原が持っていた権力構造というようなこと、様々なことがあげられます。そして一九二一年（大正一〇年）になって制度はようやく本土並みになるけれども、その後も内実においては、税金で他府県よりも実質六倍もの税金を取りたてられたり、そのために赤字経済になって蘇鉄地獄になったり、文化政策においてはそれこそ方言撲滅運動を展開されたりというように、さまざまな植民地的政策は、これはずっと後々まで終始一貫、沖繩の近代史を貫く一つの根本的な動機として貫かれていて、それは隠しようもないことです。

しかし当然のことながら、そのような状況の中で文教政策面では、同化攻撃的なことを展開してくるわけで、それはどういふことかという点、原理はきわめて簡単なことで、沖繩の固有性というものを全面否定するわけです。沖繩の伝統は、固有的なものは、個性的なものは、みんな値打ちのないものなんだ、したがって、それをみんな消し去って本国、つまり支配をしている側の国、沖繩の場合、つまり日本を見習えということになる。そこで結局は、自分を消し去って他人になる努力を強いられるわけですから、これはとてもじゃないけど、勝負においてはおかないっこないわけです。そういうふうにして

いってみれば、精神的な自殺、化石化というものを強いるわけですけども、これが一番典型的に現われたのが、つまり、方言撲滅運動だったと思うんです。

そういう様な政策として、同化政策はさまざまな形で我々の意識、精神の内側に影響を及ぼしているだろうと思っております。我々はそういう同化攻撃から自由であると思っているかも知れませんけども、けっして自由ではないんで、自分では知らないで、その中を動いていて、自分が自由に動いているつもりでいながら、結局その同化攻撃という、いわば、掌の中を棒の中だけをどうどうめぐりをしていく事態にやもするとおちいっているかも知れない。そういう疑いの眼で見えておく必要があるだろうと思っております。

新川さんの場合も強いて問題にするならば、むしろ我々は自らの伝統を全面的に肯定することは大変危険なことですので、後で申し上げますけども、批判は自由にしなければなりませんけれども、しかしそれがいきすぎたしまると、沖繩の中には何もなかったんじゃないかという自信喪失におちいってしまう。つまり、謝花は何物でもなかった。本土志向の単なるカイライにすぎなかったし、沖繩学も、そして沖繩の社会主義運動も……という形で全面否定をしてきて、そして最後に沖繩の伝統的な精神、ニライカナイも、あれば、外に救済願望をかける人間たちだから、相手を安く買ったとき、しかしお前たちが抑圧され、支配されるのは、お前たちが能力がなくてダメだからだというふうになり、不当な帝国主義的支配を合理化するためには、何としても、支配されている人々が無価値な存在であるということを、強調しなければならぬからです。

る乞食根性の産物だなどというよりなことをいって、みんな総否定をしてしまって、じゃ、いったい何を我々は踏台にして立ち上がるのかという点とみんな自分の基盤を切りくずしてしまったんですから、泥沼のような否定された自らの基盤なしの状態の中で、結局はあがきながら沼の中へ吞まれていってしまうことにならざるを得ないだろうと思っております。まあ、新川さんがそうだとはいいたしませんけれども、あれが極論という形で進歩して、いくならば、そういうところへおちいる陥穽といえますか、落とし穴を内包しているだろうと思っております。

で、今ここで思い出すのは黒人の闘いのことです。それはアフリカでもアジアでもアメリカでもそうですけれども、そういうような旧植民地あるいは植民地人たちが、今、帝国主義に対して宣戦布告を発して全世界的にほんとは闘いを挑んできているわけなんです。彼らの思いを貫流している文化的な一つの発想というのは、たとえば、黒は美しい、ブラック・イズ・ビューティというんです。るか、そういう黒は美しいんだという価値転換です。これまで黒い肌はみにくいという固定観念がありました。しかしながら、我々は衣裳として黒を着けますし、バラにも黒バラがある。そして、ノーブルな色なんです。それを全然、普遍的な根拠もなしに黒い肌はおとしこめられてきた。それはただ黒い肌の人びとが支配されてい

る人間たちだから、相手を安く買ったとき、しかしお前たちが抑圧され、支配されるのは、お前たちが能力がなくてダメだからだというふうになり、不当な帝国主義的支配を合理化するためには、何としても、支配されている人々が無価値な存在であるということを、強調しなければならぬからです。

同化政策というのは、目指すところそれだったわけですけども、そういう同化政策の目指すものを反転してひっくり返すためには、否定された自らの伝統を、自らの闘いを、自らの歴史をとり戻して、たとえばシャクシヤインの闘いではないけれども、アイヌの人々も自ら闘った歴史を掘り起こして、それに続けというような形で立ち上がっているように、やはり自らの伝統、自らの歴史、自らの精神風土、あるいは精神というものを非常に価値ある輝かしいもんだと、一度肯定する過程というものがどうしても必要だろうと思っております。その上で、しかも何から何までいいということになってしまえば、すでにあるもので足りるわけですから、何も創らなくなってしまうんで、創らざるという肯定では何もなりませんので、新しい歴史を創るためにはやはりその上で自らの欠点も冷たい目で見すえて、それを乗り越えていかなければなりません。そのためには、そこで同化主義と全く違った視点から見すえるわけなんです。権力と闘わなかつ

た、あるいは闘えなかったそういうことをマイナスとして見すえて乗りこえる。権力はこれを守礼の民だとか守礼の光だとかいって争わない温順なりっぱな伝統だとほめるわけだけでも、そういう発想を逆転させる価値転換を行方うようないわゆる自己批判というものが、そこでなされなければならぬのです。

最後に、昔読んだ本の中から感銘を受けた考え方を紹介して話をしめくりたいと思います。ナイジェリヤ出身の作家にアルベル・メンミという人がいまして、アフリカの有色人種ですが、ナイジェリヤがフランスの植民地であったということもあって、現在はパリに住んで作家活動しています。この人の書いた本で『植民地・その心理的風土』というのがありますけれども、本の言葉どおりではありませんが、読んだその印象を伝えるならば、こういうんです。

『とにかく植民者というものは、何からかンまで、自らの支配する植民地の人々の特性を価値なきものとして否定するもんである。』先程、私も申しあげましたけど、その通りで、それはどこの植民者も型通りやる事だと思えます。で、それに対して一番最初に被植民地人が求める解放の方向はまず自分を完全に消し去って、支配者、つまり本国人になり切って、自分の地位を高め様とする方向だという事です。沖繩の場合なら、さしずめ内地ナ

イズをし、日本人になりきって、それで自分を解放しようという方向をたどるというんです。

しかし乍ら帝国主義者はこれを許すはずがない。なぜなら許してしまえば植民者も被植民地人も平等になるんで、差別があつての植民者の特権なんだから、帝国主義者が帝国主義者にとどまる限り、そんな事態が発生するわけがない。これは植民地で帝国主義者、植民者は特権の座にすわって利益を独占しているという事ですからそれをよし、まあ、本国人と同じ様に言葉づかひもよくなつたし、それから習慣その他も同じになつたから、同じ地位につけましようというわけにはいかなひ。いくら努力したつてお前はずまるどころ、黒んぼなんだ。だからお前が俺たち白人の真似をするのはコツケイ至極だと、嘲笑がかえってくる。つまり第二の差別です。

その時、同化の線に沿つて、自らを解放しようとした被植民地が、どこへ突っ走るかというところ、よし、それならばよろしい。我々のものは、全部がすばらしいんだ。今まで、お前が否定したものの全部がすばらしいと主張しだす。まあそこまでは、いいんだけれども、ついでに自分たちのものは、虫食いの歯も、これは価値あるものであり、それから、まあ、飲んだくれて顔につけた傷も、これ又、価値があるんだと何からかンまで、すべてが価値のあるものとして肯定されだす。たしかに、そういう心

理的な、いわば……反動といひますか、リアクションと云うのがあるんだらうが、しかしこれでは絶対否定したものを絶対肯定しただけで結局楯の裏と表をひっくり返したようなもので、問題の解決にはならない。まだ同じ枠の中なんだ。だから、したがって、ここでは、まだ自分の解放につながる行動はとれないので、ほんとに自分を解放しようとする時は、自らを突きはなして、相対化しやっぱいいものはいいとして、継承しながら、一方においては、やはり自らの欠点を乗り越えるという運動を打出す。その時はじめて、被抑圧者、被植民地人の運動が歴史を創るエネルギーになるんだということを書いております。

これは文字どおり白人の支配を受けた黒人として、ほんとに沖繩の人々よりも、もっとも悪戦苦闘した末に見すえた自画像だつたららうと思ひし、それから自分の解放の方向だつたららうと思ひんで、それをそのまま沖繩問題と等式化できるかという問題はありましようがそれでも、根本的には、まさに同じことだらうと思ひんで、この話を申しあげて最後に沖繩問題を考える上で、何かの参考になればと思ひわけです。(拍手)

△司会 崎浜▽ ただ今新里さんの方から謝花昇の闘いを話しながら沖繩の問題をいろいろ話してもらったわけです。僕らは沖繩解放同盟、まあ大きい名前を掲げてやろうとしているわけですけどそれは決して僕らは大それたことをやろうとしているのではなく、一六〇九年の薩摩による武力侵攻以来約三百六十数年間我々の祖先は全ゆるものを奪われてきた。親、兄弟を奪われ、土地や家宝も奪われ、今また「復帰」以後海や空まで奪われ様としてゐる。その時に、我々の先達である謝花昇をはじめとしたいろいろな人達の闘いに学び今こそ我々は、ウチナンチュとして差別され、イジイジしてきた、イジイジ、ウジウジ生活してきたその生活から脱皮しウチナンチュとしての誇りをもって今までの差別と迫害からの解放のために一人一人が手を結び合い起ち上がっていくんだと(ヨシ、異議なし)その決意を我々が一つひとつその闘いをふまえながらやって行こうと思つてゐるわけです。そしてその闘いはこの運動は決して沖繩の青年の問題だけではなくて今まで関西や、関東で、いろんな生活の中で苦しめられてきたおっちゃん、おばちゃん達のその生活から学び、その成果を我々青年も一緒になつて老いも若きも解放運動と一緒に起ち上つて行こう、そういう決意を込めて今日の集会を始めていこうと思ひます。それでは多くの先輩達の話をしてもらつて、皆さんから

いろんな意見を発表して欲しいと思つて居るわけです。では最初に北恩加の沖繩部落で頑張つておられる池原のオバちゃんの方から話してもらいたいと思ひます。(拍手)  
△池原ハルエ▽ 私は本部桃原出身です。主人は嘉手納屋良の人です。悪辣な資本家に対抗して組合を結成。ブロックの青年部の方たちに色々教えをうけて、一応勝利をおさめました。皆さん団結の力こそなにごともしとげられる一番大切なことです。(異議ナシ) 団結して、わが古里沖繩を守っていきたいと思ひます。皆さん、よろしくお願ひします。(拍手)

△司会▽続きまして矢田小学校の金城さんの方から挨拶をうけたいと思ひます。

△金城良明▽

あのう今、「きんじょう」と言われてボケーとしてゐる訳です。その点、私は一昨年、初めて沖繩へ帰りました。自分のこと、家のこと、生まれが北恩加であつて、二世的存在です。沖繩へ帰つたら「きんじょう」なんどこにおつて「かねしろ」。僕今までなんとはなしに自分でもかねしろ、小さい時からかねしろ、かねしろ、かねしろ言われてゐるんで、きんじょう言われたら、なんか自分でないような感じがいたします。これ自身が差別だと私は思つてゐるわけです。もうこんな話があるのかどうか……私は小さい物心ついて北恩加島小学校卒業

し、エリートといわれる市岡中学へ行き(笑い)、ほんまに成上つたのが今この現在です。小学校の教師であります。その間、アルバイト、親父の手伝の連続で、高校を卒業しての三年間オートバイの運転手をしていました。色々する中でそれでも沖繩いうこと隠しとつたという本人であります。なんで隠したんか、一つもわからなから。私は今教育者として一番腹立つのはなんで沖繩教えてくれなんだか(絶句)。今私は矢田小学校、皆さん聞いてわかるように解放運動のいわゆる同和教育の推進校としての学校です。ただ私はここへ立つて何を述べていいのかわからない。ほんまのことという、ここへおられる人、沖繩の人、本島出身の人多いと思う。在阪の大阪におる沖繩の人たちが、うちのおやし連中がなにをしたかということに対して僕は批判しない。ほんまにようやうしてくれた。ほんまのこと。

しかし先程の話のように行政の政策によつていわゆる同化政策ということが、急に自分意識する、せんにわかかわらず自然に入られてきた形で入られ、そして、私たちの小さいあいだからの、無意識なあいだからにかなイチャーとは違うなと思ひながらでも、そういう自然な入りかたで入つてきた。私が同化政策や、あんたら今同化政策やられてんやゆうたら、何をゆうてんのや反對しやうゆう気持になる。しかし、な、ほんまのことゆ

うてな、わからへんね。そんなもん自然に入つてきよるんねん。わからんうちに入つてきよるんねん。ここの為政者のやり方いろいろもんを我々はほんまに知つとかな。いや、沖繩は帰つてきたんやノまた何とかなるやろうゆうとつたら、またおなしこと繰返すんじやないかと僕は思ひます。わからへんのや。ほんまのことゆうて、敗戦後直後僕が親がな、自分の子供かわいさにな、姓字みんな変えたんやで。本籍こち移そう思つて色々なことしてはつた。何もその人悪くない。ほんまにそう思つたんや、就職さそう思つたらな。うちのオヤジかて、お前なもう寄留やない戸籍こちあるさかいな安心しなや。ゆうてくれた。僕そりやな。思ひました。ほんまに、自分の名、名さえも名をのられへんのやで、ほんまに、で今頃になつて、差別なんかなかつたということはどういうこつちやノほんまに。

私これわからんね。経済か、銭か、確かにな。沖繩の歴史考えたら銭もうけになつてしまふ。やっぱ確かにわしとしても、もうけたいと思ひます。自分よせんから残念ながら手出してへんけどな、ほんまにせへんで。観念と違うノイデオロギー違うノもうほんまのことゆうて、私な、ほんまになあ、年からゆうて、終戦の時に、沖繩へな沖繩の人帰らなあかん言われた時は、自分ナイチャー思つとつたからな、ナイチャーおもつたのはいい

加減思っていたんやけども、その一生懸命やっているのになんでわざわざ帰らな〜あかんのか思うた。その時一番差別したのは朝鮮の人やった。わいは、朝鮮の人帰るの当然や思うて、自分帰るのはあかんと思つたのはまったくおかしい話やけども、その時そう思つた。なぜそれがそういう時分にそういう風にしか考えられんかったんか皆よく考えて欲しい思います。先程、新里さんが言いはったな〜、同化政策いうな政策ちゆうなこんな恐いもんやいうこと、もつとなんでウチナンチュー知らんかいうて一生懸命唱えたけどな〜我々の刀不足で……。(後の歴代の県人会長の写真を指して)あの、戦後すぐわな、みんないきりたつて、ここにおる先輩みんな一緒やうてん。いわゆる沖繩言葉でチバツてやった。ところが我々の刀不足でな〜ほんまに若い人たちは、こんなにして今日こんなして集つて、みとつて涙でるんね。ようせなんだんやノわしらやうていたらいけると思つてたんやけども、ほんまになにかあると運動する。またあと尻すぼみ、またやると尻すぼみ。ほんで今日の集會も、ほんとうて正直ゆうてもう我々のまた二の舞チャウか思つてましたんや。ほんならこんなようけいおるやろう。わし興奮して何ゆうていいやらわからへんのや。ほんまに嬉しいのか頑張らな〜あかんのか。

一番根本な、わし自分の領域だけいうわ、あのな〜沖

話、実に感動するわけです。が私とて五二才ですけれども小学校の四年頃、そこでですね、この南恩加島小学校を私は卒業するわけですが、ライオン橋です。親父が工員さんで、今であれば工員で昔は職工なんです。まあ木津川の向うにあるそうですけれども大阪製線株式会社とかいうそうですけれども、その職工をやっていました。ところがですね、小学校四年頃といいますが10、11なんです、それが沖繩に帰つたのは、来てからです。沖繩に帰つたのはついでこの間佐藤栄作が沖繩へ行つたことがありましたね、彼が行つたちよつと前です。彼は僕の後についてきました(爆笑)。私は行かなかつた理由はたくさんあるわけです。それは結婚した、子供が大きくなつてくると金もないということがひとつあります。ひとつあるわけです。それはあの頃でありますから今五二才だから四五、六頃ではないですかね。四十五、六になつて初めて沖繩に帰ろうとしたわけです。それでもね帰らなかつた。それまでの僕です、学校へ行くのに東京で学校をいっていたわけですけれど、学校行つた。それから兵隊行つた。帰つてきたらあの年なんですから、結婚した。子供が大きくなつた。やっぱりこれはもうその流れです。帰る余裕がなかつたわけですが、あの時帰ろうと思つたらもう一つ帰らなかつた理由は金

繩の子、あれだけの苦しみを持ってきた子がな〜、沖繩からこつちの学校にきてな、すぐまあ平尾なら平尾の小学校でできるゆうたらもうほんまに天才児でもできへんで。できへん子やな、沖繩の教育水準は低いからや思うている先生がおるわけやノちやうやろう。教科書は違つてもなにしても学力全然おとろえてへんで。俺はな絶対それだけは信じてんね。それがな〜。現象面だけ見るとな〜誰でもそう思うんね。そんなもん、テストしたら点数わるいし沖繩何教えとつたんかな思うんや。そんなんで、ほんまに人間はかれるか。ちやうで〜。わしらそれ信じるからな、絶対大阪の教員連中に対しては頑張つていこうと思つてん。それ以上よいわんわ。わし子供な、子供信じてな〜絶対できるよにせなあかん。わしら少々犠牲なつてもいいけどもな、子供にさしたらあかん。それだけ訴えてわしもうやめとくわ、もう興奮してよいわんわ。(鳴りやまぬ拍手)

△司会V 金城さんの今の言葉を肝に銘じて、沖繩差別がなくなるまでみんなで頑張つていきたいと思つています。同じように尼崎工業高校で沖繩問題研究会の顧問をなさっている木村さんの方から発言してもらいたいと思つています。

△本村周広V 今、金城さんの今日になるまで自分の名前も言えなかつた。と、沖繩出身とも言えなかつたという

のない事とですね、先に金福さんがおっしゃつて居りましたね、いろんな方言撲滅運動おっしゃつて居りましたね。ほんで私は四十四、五になる今日ですね、沖繩の言葉ひとつしゃべれなかつたわけです。

今でもまあしゃべれせんけど。聞くのは聞くわけですけれども、まあむつかしい所以外はですね。ところがそこでしゃべれなかつた。そこでね小さな小供ならです。自分の田舎帰つてもね、まあ自分の故郷のウチナグチ知らなければですね、ある可愛いさがあるわけですけれども、四十五、六になつてですね、自分の故郷に帰つて自分の故郷の言葉ひとつ知らない、そして相手するじいさんはあさんに対して挨拶ひとつできない。こういう事になりますとね、自分のみじめさがしみじみと感ぜられるわけですね。ほんといつたい私はどこの人間だろう行つてはたしてほんとに血のかよつた挨拶がですね、つなかりがもてるか、どうか、これに大きな不安をもちましてですね、言を左右にして帰らなかつたこともありましてですよ。ありましたが帰ろうと思えば帰れるわけですよ、ところがそういう事が大きくなつたりね、自分の心のクサリとなつてしまつてですね帰れなかつた。そうするとね、ほんじゃあこれ考えてみると、ほんとに今沖繩はですね、土地を取り上げられた、先の話にありました様にですね土地を取り上げられた。そして今から海まで取

り上げられ様としている。ところがね、こういう様にやっぱり我々人間そのものをね、取り上げられとったという、で、こういうことをですね私はその年になって初めてわかったという事です。そういうことはさっきいろんな話がありましたね、差別の渦の中です、ね、泥の中でもはまり込んでおられますから、それが差別やら、それが正當なことやらわからない。そしてその上です、ね、同化政策をぎゅうぎゅう押しつけられてくる。やっぱりこう大和人であってですね、そうふるまうことが、りっぱな人間であるという事を植えつけられている。だからすべて沖繩のものですね、破廉恥で切り捨ててですね、自らですね、少しでも内地人になろうとしてやってきました。と言う事はですね、最後にこういうみじめさをですね、味わされたわけですね。

まあそこで発奮ということではありませんが、ええ、まあ、ここへ出てきたら、私としては話すべき事はやっぱり高校生の問題しかないわけですが、まあ学校に沖繩問題研究会というのがあるわけですが、その子供達というのはですね、ほとんど皆さんとこう若い青年と同じ様な内地生れの沖繩の子弟なんです。だいたい高校生ですから、この戦後ですね、ずっと後になつて生れた子達ですね、その子達はですね、やっぱりこうどう、いうんですかね、あの、ウチナンチュではな

って来るわけですね、そこでですね、生徒達が、いわくですね、まず生徒の中で話がありますと、朝文研の生徒がですね、全部朝鮮人なわけですが、沖繩問題研究会というのは沖繩の子ばかりです。そこでその朝文研の子がいわくですね、自分達は日本で生れて日本語しか話せないそのそういう世界で育ってきた、なるほど家帰ればただ父や母はですね、朝鮮語を使うことはあるけれども、もうそういうのはいつも頭から馬鹿にしているし、そんなことは習おうという気はないですね、そうだから朝鮮の歌もわからなければ、朝鮮の楽器もわからない、何もわからない。そして学校へ行ってその解放だどうのこの言われたらですね、いやいやながらその朝文研の部屋に行ってみるとですね、いろんなところで朝鮮の文字が書かれているし、朝鮮の言葉が話されるし、歴史が書かれているし、いろんな事がここで、聞く、見る、ことよってですね、だんだんと何かしら自分がこうやっぱり、自分達は、こうと知ってみると、日本人になろうとしたけれど、日本人になりきっていないし、朝鮮の文化を聞くですね、そのひびきというのが、非常に激しくてですね、こう敏感にですね、感じられてくる。だからやっぱりその民族の血は争えんという事は彼らは感じているわけですね。感じているけれどもやっぱりそういうことはですね、………そこでやっぱり朝

いわけですね、といて内地の者かというところではな  
いわけですね。では本人達は何も生活からぼっといて  
みて居ればですね、沖繩、沖繩、言っても言わなくても  
済むじゃないか。というそういう非常に安易な考えでい  
るわけですがね、ところが、あの、最近、つい、昨日、  
今日の事なんです、朝鮮文化研究会というのがあるわ  
けですがね、タルミにある朝高生、朝高生をですね、招  
待してそしてその朝鮮の踊り、あるいは音楽だとかです  
ね、こういう事をですね、友情とか支援、出演という形  
です、ね、連帯という形でもらっているわけですね。

今年も又それをまあ取り上げ様と、こういう事にな  
たわけですが、ところでですね、まあそこで生徒会、生  
徒会の方も待ち合わせているわけですが、生徒会、生徒  
会の問題としてですね、いったい朝高生を呼んでですね、  
お招きして、そしていろんなこの催しをしてもらおうと  
いうことは、いったい、その私は尼崎工業高校に居るの  
ですが、尼工としてですね、どういふこれは意義があるん  
だ、どういふ姿勢で我々は迎え様としているんだ、こう  
いふ話になってきたわけですね、生徒の中で、そこでで  
すね、ただ毎年呼んでいるから、来てもらっているから  
あるいは何かおもしろいから、という様なですね、何か  
そういう様な芸人をですね、呼ぶようなですね、かっこ  
うで、そんな軽い気持ちで、来るはずはないという話にな

高生をね、そういう人達をその機会があれば呼んでもら  
って我々と連帯をして、我々といつたって一応彼等この  
朝鮮人でありながら日本の学校へ来ているんだからです  
ね、だから朝高生とはいろんなことにおいて内容が違う  
わけですね、だからその朝高生と連帯して、自分達もす  
こしでも朝鮮人になりたいというのが彼らの要望なんで  
すね、まあそういうところから見ますと、うちの生徒会  
長いわく、なる程うちの学校に朝文研が、あったのにも  
大きな問題があるのだけれども、朝文研の者がですね、  
やっぱり自分達の同じ祖国をもった同じ文化を持った兄  
弟達と連帯したいという事言っている。考えてみるとで  
すね、かつて日本人は、我々の先祖はですね彼らのま  
ず本名を奪ってきた、文化を奪ってきた、すべて奪ってき  
てですね、このあいだはですね、ほんとに朝鮮人である  
のですね、しかも日本人、日本においては朝鮮人、朝  
鮮人いわれながら朝鮮人の文化にも持っていない。そ  
ういふ血の通った朝鮮人になりきっていない。そういう  
犯罪を犯したのは我々である、我々の祖先であることを  
彼らはやっぱりね、そういう所までですね深めていくわ  
けです。

それ聞いていて僕はね、どこかで聞いたことのある話  
しだなあと思うわけですね(そうだ、笑い)。なんか朝鮮  
人、朝鮮人といわれて問題にされていることを聞いてい

ると僕の方はですね僕は僕はどうなんだと言いたくなるわけですね。まったく同じ差別をうけてですね、こうやられてきている訳ですね、だからねこういう今日こうして集ってですね、さっき金城さんももうその感激して何を言っているのかわからんと言っていたわけですね。私もですねやっぱりこうして若い人の顔みるとね、なんかね、私の時代にこういう沖縄の問題をね協賛しようとかね、なんかその把握しようとか、とらえようとか、運動しようとかね、そういうことなんかね、これっぽっちもなかったわけですね。僕らの時代は少しでもエリートになって、といっても謝花昇じゃないけどね(笑い)、そしてなんかその底辺のものに少しでも、恵みを与えて、そして俺はもうなんか勲章でももらってね、そういうことばっかり教えられて来たわけですね。(笑い)

だから皆さんを見るとですね、なんかやっぱりね、一人、一人の顔を見てみるとね、どっしりした感じがするわけ、非常にその根のはえた力強さを受ける訳です。僕ら非常にこう軽いな、核のない、非常に軽い人間に作られています。だからウチナーグチも忘れる、だから今だにですね、ほんとに人のおらん所ではですね僕もウチナーグチを便うんですよ(笑い)。今笑ったらだめなんだよな(笑い)、やっぱりな、なぜこういう人間をつくったかというとなんでですね、こういう事はね、中味があかん

大事な事ですけども、それだけではほんとに解決にはならない。わんぱくでもいい、たくましく生きてほしいと、こういう事なんです。でいろんな言いたいことあるわけですけども、えーそのなんです、さっき、まあついでこの間ですけども、あの安里穆千代さんがですね、「彼は台湾の台南市で市会議員をやった。」という事を言うたんですけども、ある青年がびっくりした訳です。ね、とにかくそういうことを知らないのがあたり前なんですけども、かつて沖縄が植民地であったか、どうかは別として、前は植民地であったはずなんです。そういう事はかつて奈良原の話で出ましたけれども奈良原の思ひままにですね牛耳られてきた。

そして、その沖縄を支配したのはみんな鹿児島島の商人であつたりですね。内地の役人ばかりだったでしょう、そこですね「沖縄の役人はどこへ行ったのか」皆台湾へ行っている訳です。台湾行って植民地へ行ってますね、沖縄出身の役人や教師は肩を怒らせて威張った訳だね、沖縄、自分の生まれた沖縄ではですね、そういう地位を与えてもらえない。むしろ内地でも与えてもらえない。どこ送られてたかという皆台湾、朝鮮の植民地へ送られている。そこでいわゆる侵略の尖兵としてね使われた訳やね、沖縄人達はそういう点でもね我々はまあやっぱりこの少しでもこう珍しい話やないけどもですね、台湾行

ね、中味が、中味がなっていないわけだ。実に情けない、残念だ、こういう、こういう人間を植民地人と言う訳だね、植民地で完全に造られているわけだそういう人間にほんとうにこう、沖縄の私達がなつてもらいたくない、そういうことですね。ほんとにこういふ運動に取り組んでいるという事はね、ほんとに金城さんじゃないけれどもですね、なんと言うか涙が出る様な感激を受けるわけです。だからいろんな我々先輩としてね、いろんな事をやってきましたけれども、いろんなつまづきやしくじり、沢山あるわけです。ありますがですね、しかし皆さんもそういう事はあると思いますが、そういう事を乗り越えて、とにかくいろんな人達の思想闘争がありですね、生活の闘争があり、いろんな事がある訳だけれども、ウチナーンチュにどっちは変りない訳ですね。どんな団体であろうが、サークルであろうがつながりであるうがですね。将来はやっぱりやっぱり沖縄の我々人間としてですね、とにかくその骨のあるね、非常になんだか歌い文句じゃないけどもですね、わんぱくでもいいたくましく育ててほしい(笑い)ね、だからね、ただ人間がいいだけじゃあかんね、人間がいいだけじゃ、えーさっき誰か話ありましたですね、えーどういふことでしたかね、とにかくもうただ人間のいい人がいいというだけではあかん、あかんね、その人間関係は大事ですよ、そりゃー

った人達、屋良県知事あたり台湾でそのだいぶ永らくおつてんやからな、台湾で日本の皇民化教育やってんやからな、だからねそういう人達が沢山行ってそしてむこうでやっぱり日本人、我々は日本人の役人だ、教師だ」といふ顔をしてですね植民地をやっていたわけや。言えば恥ずかしい話だけれど、話だけれどもほんとにこの血の通った人間的な面が出ると、なんかその権力的な面が少しでもこう内地人と同じ様な肩をいからす様な、そういうそのものが欲しかったし、それが持つのが当たり前だという教育をさんざんやられてきたからね、ある面ではね当時のやっぱり一部の先見の明がある人をさておいてですね、これはもうやむを得ない、そういう時もある訳です。けれども、我々はそういう一員であつたということをですねここで反省しながらですね、でーどう言うんですかね、皆さんと共にね、まあ昔は五十を越えれば人生は半ば越えてたと言われておつたけれども、まだあのう、目もいくらか効きますし、まあ酒飲まして人も人並に飲めますし、えーそういう元氣もありますのですよ、皆さんと共にね一歩でも二歩でも歩いていきたい、というふうに思っておりますので一つ頑張ってください。

△司会 V 誠にすみませんけれども、今日の会合を準備するため、会場費とか講演費とかかかりましたから、カンプをお願いします。今、本村先生の方からお話がありま

した様に、我々差別されたウチナンチュが差別の中で、中国人とか朝鮮人とかアジアの人達を差別してきた、しむけられてきた歴史を反省する必要があると思います。本土で部落解放運動なり在日朝鮮人の運動が広く起っています、そういう同じ様に差別された人達との運帯の中から沖繩解放運動を進めていきたいと思っております。次に、尼崎で頑張っている宮平君の方から話してもらいます。

△宮平君 V 兄弟の皆さん今晚は、僕は尼崎神崎の方です、すね、そこで育ったわけですね。生れは宮崎ですけどね、親が与那原出身で大阪へ出稼ぎに行った時に、尼崎の神崎に、社会の意識として位置づけられている部落ですね、エッタ、非人というそういう集団の中でね、やっぱり沖繩県民が生活しやすいから入ってくるそういう社会の矛盾やね。やっぱり大正区に集まったり、西成や宝塚、いろんな社会のいわゆる悪やいわれ、収奪されている地域に沖繩県民が追いやられている。その現状がなぜかというところは、さっきいわれたその分裂支配の中で行政がやっていること、それを僕は解放同盟の中でね部落解放運動の中でかかわって知ったわけですわ。

そして十月十一日に関西沖繩解放同盟準備会をやね設立するに当たって、一応参加してくれという要望があって、僕も部落解放運動を闘う中で沖繩差別と部落差別の共通

人の本当の苦しみがどこにあるんか、。。。自分自身も皆さんと共に、闘ってそれを自分自身の問題としてつかんで闘っていきたいと思います。これで終ります。

(拍手)

△司会 V 沖繩の人で原爆をうけた渡慶次さんが是非皆さんに挨拶したいと申されていますので、お願いしたいと思います。

△渡慶次 V チバリヨサイみなさん。今晚は私はとても皆さんと話してできる教育もありません。それというのは、私は大正一二年に、親につれられて炭坑にきて、小学校六年は南恩加島で卒業したんです。一三回小学校を渡りました。その間人の勉強の半分くらいしかでてないのです。それで泉尾第一尋常高等を卒業して現在に至っています。で、殆んど五十年いっのを内地でくらし、経験をたけて皆さんにお話ししたくて出たんです。

私は、沖繩から来てね、炭坑の学校に入りました。そうすると沖繩の人がだいたいぶん連れてこられていて、小学校の一・二年に十人ぐらいいったんです。そのうちに、沖繩の人でなく鹿兒島の徳之島とかと論とかあいう所から募集してきたもんがおつてね、学校勉強している間はよろしいですね。放課後になつたらカバンさげて教室でたらね、与論人じゃいうてみんな追いかけてくるわけ

性を知ったわけですわ。結局沖繩ですわね。我々の祖先がやられてきたことは行政、差別行政である。それに踏まえたら沖繩をほっとく訳にはいかない。だけど、それをどう闘っていくかという問題が僕にはわからないんです。部落解放運動にかかわって、行政闘争をする中でね、やっぱり自分らの生活が苦しい、なぜ苦しいんかということ、つからだから、その根底にある行政の悪辣な非劣な政策が浮彫りにされてくる訳です。解放運動、部落解放同盟の闘ってきた歴史をやね、その水平社五十年の歴史にあるけども、その中味をいうたら生活と密着した運動闘っているの、というところは住宅要求組合なり或いは同和教育、そして職業問題、就職問題ね、そして結婚に対する結婚差別の問題なりをね、中央本部が率先して六千部落、三百万部落民の解放運動めざして大衆的基盤を確立している。で、沖繩の場合どうかというところ、沖繩人民の自己解放に根ざした運動やっているかというところ、あまりやられていない。で関西・関東においてもその運動自体が何であるかということが、知らなかつたわけですわ。第一そういう組織あるかないかわからん。で沖繩解放運動を通じて、関西であるいは関東で我々兄弟姉妹が立ち上がらなあかん。沖繩差別を我々はもろに受けている。しかし僕自身はね二世ではっきりいって沖繩の

ですわ。僕らは、むこうが一〇人も二〇人もおつてね、逃げる手がないからね。そしてそういうことがあつても私には何か意味がわからなんだんです。そして大阪きても、学校卒業していわれたんが、働きに出てもね、内地の人みな沖繩の人バカにするんですね。私沖繩の人やいうて堂々いっただんです。そして沖繩の人なんかすげさむような感じですよ。ほんでその人は沖繩がどこにあるかわからんのですわ。沖繩をバカにしながらその人沖繩がわからない。その人アホとちがうかなと、わし思った。それで私は丁度、今の中学になるな、その時分にある先生に教えられたんですがね、その先生からベスピア火山噴火でボンベイが埋ったという話を聞きましたね、そのボンベイは一時はものすごく栄えましたね、それで、上の人はぜいたくして、下の者はまあ搾られているような形だった話ですけれどね。そしてその火山がある時代に掘りましてね、掘ったら、この門番は剣つけてちゃんと門番している。その上の者は、もう逃げるのに大騒動でそのまま埋まった形で出ましてね。そして先生はたくさん宝物を持ってうようよ逃げる人より最後まで門番を守っていた人が立派じゃないかと先生はいわれましたね。私はそれを覚えておりますし、今でもそれはそうじやないかと思っております。

それから、もう一ついいたいことはね、おじいさんな



んかから話聞くとね、沖縄の殿様は三つあったんです。中山、南山、北山とね。それが日本に併合される前にね、沖縄にも家来がおったわけですわ。やっぱり大和人でも負けてもいいから闘かおうという人が大多数でした。家来がいきりたつてね。ところが殿様はね、むしろ三人が内地に行って首切られればお前らは戦争せんでもええからってみんなわずかの退職金をもらって解散して、殿様は首を切られるために日本にきたんですわ。鹿児島へ舟でわたって、鹿児島から東京まで駕籠にのって、ところが東京行ったら首切られんとね、爵位をもって暮したんです。一番上の殿が尚泰侯爵で、三人ともみんな爵位持って暮らしたんです。ところが沖縄の殿様が沖縄の人を助けるために、ケガせんために自分ら三人が犠牲になりて東京に行つたんです。それだけ私は沖縄立派やと思ふんです。そしてね、私はここ五十年内地で暮らしてるとんですがね、この家で五百年前の血筋だれかいうてね、わかる家は殆どないですわ。我々沖縄の人はね五百年前の自分の先祖みんなわかっています。自分はわからんでも本家行つたらみんなあります。それだけ私は沖縄が立派やと思つています。そして今ね、沖縄のうたはこっちの人にはわからんですよ。わからんで、今使つている沖縄でね、うたは昔のうたは現在の日本の平安室町のことば使つています。それ位、沖縄は文化的に進んでいたんで

た。こう思つたんです。しかしね大人をげないから、この散髪屋に行かんことにしました。でも、それいふのも、そのまあ大正や西成で十人か二十人の沖縄の若い人がね酒飲んで乱暴するんですな。そのためにこういう汚名を着せられ、めだつんですな。その沖縄の人いうもんが、こつちの人には、十人か二十人かたまつてやるもんだから、沖縄の人いうことですぐ目だつんですな。だからそういう意味で私はどういったらええか、誇りをもって頑張つて欲しいんです。

そして、私はね、まあ原爆の話になるんですが、もう日本はね五月頃には戦闘力なかつたんです。で、終戦になつたのに三月がかりました。で、この三月はね、どういうことになつたかといひますとね、これは天皇ヘイカの助命運動ですわ。あの人だけ生きのびたんですわ。そして、現在もね。三月というのは戦闘力のない日本がアメリカに爆撃されたくさんの人が死んだんです。

それからみたら、沖縄の殿さまがいかに立派だったかというが、わたし、わかりませんよ。

そういう立派な国だからね、みんなも負けんように、「ナイチャーに負けるか」そういう気をもつていつても頑張つてほしいです。

それから、もうひとつ最後につけたしておきますが、大正区に沖縄の人たくさんいますが、「原爆」に関係し

す。

十年か五年前に沖縄に行つたんです。波ノ上の方に行ってね、そこで若い人が煙草くれいりんですわ。私は煙草すわんからな、煙草もつてないいうた。どその子が、お前等は内地の人間は勝手に戦争しやがって負けやがって、沖縄だけこんな難儀させて、煙草くれくれ、こんないうんです。そして私は沖縄のことはようしゃべらんきくのはねよう聞くんですわ。沖縄の人間やから、あーすまんと思つてもどうもならんです。その子は、チンピラのような感じでね、もう脅迫するような形だったから、俺はこんな沖縄までいって人にどつかれたらカッコ悪いからな早う帰ろう思つて私は帰りました。しかし、その人の気持も、富村さん東京タワーでやった気持も私みんな同じ気持ですわね。

それから、私はね、あの大正区の先の方に安い散髪屋があるんです。四百円です。そこ行ってやつたらね、ここに酒飲んでちよこ文句いう人がおつて、店の人は、あの沖縄の人は相手したらあがんで、こう散髪屋の人がいうんですわ。で私はもう腹立ってね、その酔つてる人はね、私ほろほろ歩いてるから内地の人でも名前聞いたらわかるんです。沖縄の人でないのにな、この酔つたらつてくだまくやつは沖縄の人間だと決めつけて、私その散髪屋に腹立ってね、文句いってやろうかと思ひまし

た人が、五・六人おられます。沖縄には長崎に、徴用でいた人が、三〇〇人以上ですが、ほかに広島の方もだいぶ、いますがおおよそ両方合わせて五〇〇人はいてると思ひます。

ところが、沖縄から、原爆のこと政府に面どうみても、れ言うても、年間で、二・三人東京へ行くだけだ。

わたしは大阪にいる沖縄の人が、大正区に五・六しか「被爆者」おらんのですが、やっぱり、応援してもらつてね。政府に面どうみてもらうように、思つております。沖縄におる三〇〇〇人の方々からみなさんをお願いしたいんです。

八真久田 正V きょうの集会を共に成功させようというところで、共同のピラマキ、ステッカー張り、集会の準備など、一諸にやってきた者として、また関東沖縄解放同盟準備会の代表として、関東の沖縄解放同盟準備会結成の報告を簡単に述べさせていただきますと思ひます。

沖縄解放同盟については、東京においても多くの人々から要請というか、希望されていながら、今日の関西沖縄解放同盟準備会の公的発足まで、そういうものが現実化しなかつたということがあると思ひます。

関東においても、僕らは、ただこう観念的に論理をこねまわすのではなく、本当に生活に根ざした、例えば、エイサー大会やアンガマー大会や、酒飲み会でもいいと

思うんです。そういうことから、また、それにとどまるのではなく、同時に沖繩出身の青年たちの生活のめんどろみとか、職の斡旋とか、アパートのめんどろみとか、そういう活動もやっていたりするよな、そういう意味での大衆的な、政治的な組織をつくっていく必要があるんじゃないかという討論を何回か行ってきた訳です。

10月11日、関西における沖繩解放同盟準備会が、本村さんや、山城君などを中心として内部的に発足し、関東にも呼びかけられてきた訳です。で、関東の方でも、かねてから、関西の地で戦前、戦後を通じて差別の中に苦しめられてきた沖繩出身の労働者と、組織的有機的に結びつきうる、そのような組織をつくっていくという話ですがもち上がっていました。そこで、10月17日に、新里金福さんと徳田正次さんを含めて、沖繩青年同盟と沖繩解放同志会を中心に、沖繩青年に広く開かれた大衆的、そして、戦闘的な組織を関東において断固としてつくり上げていこうという意志一致のもとに、関東沖繩解放同盟準備会の内部的発足を勝ちとってきました。

きょうは、関西における集会の成功のために、関東から支援として、色々な準備の手伝いということで来た訳ですが、関東の方でも同じように、今月の30日に「謝花昇祭65周年沖繩討論集会」を、関東沖繩解放同盟準備会の公的な発足として勝ちとっていきたいと考えています。

。。僕は背は小さいですけどね、何ですか、大きいものをもっているのが好きなんだなあ。天王寺あたりでもよくポリさんにつかまる。そこで、ポリさんのところへ行ってきたわけですか。あ、僕、実は教師をしている者ですけどね。(爆笑)

実はここへ来たのはですね、謝花昇の討論会があるというので来たんですが、あの、僕は今年の夏ですね、謝花昇の生首をつくったんですよ。僕は、彫刻をやってる者でしてね。(爆笑)『「狂気」と謝花昇』という題で、彫刻をやって、個展を開きました。

沖繩の土着から発想を得て、久米島事件から「ひんしの子を抱く女」、「漁民の怒り」とか、それから、今、エキスポランドの下に関西の彫刻家展があるんですが、「摩文仁が丘」という題で、でかいのを出してありますので機会があれば、見て下さい。(中略)

いわゆる芸術という問題、たとえば、三味線の音色は大正区でも時々聞かれるんですが何かこうりっぱに、舞踊もそうですが、照明と舞台の上で演出されるようなものは、確かに華やかで、きれいですが、ところがですね、新斎橋あたりのヤマトンチューが往行している文化の中でですよ、ムシクワ、ひちやに、あぬようさい、サンシクワ、ひちやにカチャーシークワ、ひちやみそりれ。りっぱな抵抗になりますよ。文化というのは解

きょうの金城さんや、あるいは本村さんをはじめ、ながいこと関西地区で生活されてきた先輩、諸先生方の迫りあるお話しをうかがって、僕自身、この間の活動ももう一度点検しなければならぬというよな、反省の気持ちにかられている訳ですが、そういう意味でも、本当に、自分たちの兄弟、姉妹たち、祖先を大切に、そして、沖繩青年の誇りをもって、断固として、沖繩を沖繩人民の手にとりもどすために、沖繩と日本を貫く、大衆的な解放同盟の結成を断乎として勝ちとっていきたくて考えています。

そういう決意をはっきりと表明し、関東沖繩解放同盟準備会の代表としての発言にかえさせていただきたいと思えます。

△金城 実V こんな顔ですけどかんばんして下さい。あのですね。僕は警察によくつかまるんですよ。二日酔いするとしんどいですからね。

実は学校帰りに赤信号のところまでタクシーを待っているとですね、半時間待ったんですが、苦しくなるとのたうち回ったたら警察が来ましてね。「職務尋問があるから来い」というんで、「なんで尋問される必要があるか」と言い合いました。そこへ二人のポリさんが来てね、とにかくつれていくという。「一足があるからついていく」といって、デッカイカバンをかついで

釈の仕方によっては大きな武器になります。

わたしの親父は志願兵で、もう死にましたけれどね、摩文仁が丘にうずまっていますよ。

僕は今度も行きましたが、別にヒールや花を持っていくわけではない。親父の名前がそこに書いてあるのを見に行くだけです。それで、僕、摩文仁が丘という戦場から死体を持ち上げていく親子の像をつくってあるんですよ。三メートル程ありますよ。摩文仁が丘も結局は沖繩の文化としてとらえなきゃいかんですよ。ヤマトンチューが行くから、同じように、わしも観光にいったらやろ、やれ沖繩の戦場はこうやった、それではあかんですよ。あそこ立っている石が何を物語るかわね。石をガンガンおいてね、各県が、わしの県の方がよく、日本の軍国主義に手柄を上げたんやいうよなね、戦死していった人を美化して、「死」を抽象し、美化したもんですよ、これ、ね。

僕は、夜間中学で講師をしているんですけどね。朝鮮の出身の人たちが私のクラスに十七人います。沖繩の青年が、ブラジル帰りですが、四・五名います。そらいろいろむつかしいことがあるんですよ。ほんで、あの英語教えているんですけどね。免許は英語しかないので。(爆笑)彫刻はコザ暴動が燃えた以降、彫刻に変わってですね、こっちに出てきたのが一九五八年ね、も

う長い間もっとも半分は落第しましてね(笑)。大学も八年行って、そういう中ですね、まあ話しはとびますが(笑)、英語を教えているんですよ。(笑)発音を教えている時にね、朝鮮の方が、突然今まで誓っていたものをバツとこうページをふせるわけね、おかしいなあと思つていくと、朝鮮語で書いてる訳だけど、こっちがいくと、やっぱりこうおさえる。その時にね、言ったんです。そもそも言語、これは文化として、言葉にいい悪いもない。沖繩の方言が悪いとか、日本語がいいとか、英語が上等で、それから黒人街の下町で使われるもう一つの英語はだめで、というよりなことではない。それを言ったんです。それ言ったとたんに、その朝鮮のおばさんですね、書きよるんですわ、朝鮮語で。英語の上に書いてる。と、ちょっと考えてみたら、わしは何故英語を教えるにゃあかんのやとなつてきたらですな(笑)これはもうどうしようもない。残念ながら、僕は朝鮮の言葉は知りません。で、アイウエオだけを習っているんです。朝鮮の言葉を、英語のカナでね。あと、ブラジル帰りの沖繩青年は、また、日本語通じないんですよ。あそこで生まれてきているから、ところが沖繩の言葉はこれがよく通じるんですわ(笑、拍手)だから、訳しながら、いつものまにか英語の授業じゃなくなつてしまふ。この大正区にも七・八人位ブラジル帰りの人がいますけどね。

まあ、謝花昇については金福さんからお話しがありましたので、僕が言いたいのですね、天王寺の夜間中学を、沖繩の方も大いに利用すべきだと思つてます。それから文化とは何か。こう、要するに、抵抗できるものにしていくというように感じています。ウチナーグチもそういうところからとらえていかないと、ただ、あちまやいなかい、エレキひけすむん、ものじやないサンシンひきながら、昔、うむいんだち、涙こぼすようなものじや、抵抗できませんよ。土着という、抵抗できる土に、ドンソツと入っていく。沖繩の文化の中に、抵抗の原点があると思います。小さな自分の生活の肌についていくという、そういうものはやはり大衆的なものでなければならぬと思う。

何話しているかちょっとわからないですが以上、あ、きょうもほんとに四時間授業あったんですが、二時間カッとしてきました。(笑)一時間目は彫刻をしてきましたね。それ、免許ないんですわ。ところが校長が(笑)生徒もまたみんな大人ですから、いままら美術ならってどうやら(笑)夜間中学だと、最高で七四才のおばあちゃんがいまいますからね。北海道の人ですが。沖繩出身では四七・八才ですね。畠袋さんという方がいます。文部省に反対してやるような教育をしようというんでね、全

部で、彫刻を作っています。夜間中学生の像というものを、今、せつこうです。服にくっついてるんですが、それも八分通り出き上がっています。労働者の形で、本をもっているようなもんで、文部省はこれを見て、こんな中学校は知らんというんじゃないかと思う。

とにかく、おじさん、おばあさん、昔わしら勉強できんやつたという方々に呼びかけて夜間中学を指導していくといった形から、一つの文化の視点をみつめていくというようなね、エーものが、やっぱりあそこにあると思つておりますから、是非あの申し上げて下さい。それ言いたくて、こっちのぼつたんですが、話してみたら、あちこころんだり、こちへとんだりして、いつまでもつまらんですから、このへんで矢礼しますわ。(笑・拍手)

八嘉陽宗博 V 僕が大阪へ来たのは68年です。沖繩で学校を卒業して、いわゆる集団就職で来た訳です。二〇〇名から三〇〇名、ほとんど大阪で、ま・東京の方へも行くんですが、僕がなぜ大阪へ来たのかいうたら、別に好きこのんで来たわけではない。

やっぱし、沖繩で生活したい思つたんだけど、そりやけど沖繩では学校卒業しても、職はないし、誰かは出ていかなあかん、そういう状況の中で、大阪へ来たわけです。

で、大阪へ来たら、どういうことがあったのか。僕らみたいに集団就職で来たら、企業の中では、寮の問題とか、あるいはパスポートの問題、あるいは健康保険の問題とか、色々な形で、がんじがらめにしはられていく、そういう状況が待ち受けていたわけですよ。

それは東京でも一緒だと思つけども、そういう中で、やっぱし、一番感じたことは、そういう若年労働者が、日本へ来るけれども、それを迎えるところの大衆的な先輩のそういう組織がないということ。このことは何度も繰り返し話して来たんですが、やっぱし、そういう思いというのは現在でも一緒だと思つてますよ。

そういう意味で、この関西、あるいは関東の沖繩解放同盟準備会が、ほんとの解放同盟になるような、そういう大衆的な、組織と運動を、やっぱし、ウチナーンチュたあ、みんなし、力ああさんネーならんでい、思いひんさ。

おばさんたあ、おとうたあ、おじさんたあ、大阪には八万から十二万人いると言われているけれども、統計的な数さえも、現在まだわかっていないわけですよ。そういう状態もやっぱし、我々が組織的に、現在何名いるとか、その生活は現在どうなつているとか、これからどうしなければならぬいんかいことを、みんなし、おっちゃん、おばちゃんもまじゆんし、考えらんとならんは

じ、わんねー、あん思いびんよー。あんすぐと、なーウチナーや、日本かい復帰さしが、チャーなとうが思いねー、ちゆくちん、ましエねーびらん。

ウチナーから、家族、集団就職もそうやけど、なまからや、ウチナーんじ、仕事や無エびらんぞーさい。東京かい、内地かいやあびーさい、ンナ、大阪んかいちゃーびーんようさい。はあ、内地かいやあびーねーちやあないが。この前もね、一家で就職に来て、結局は周囲に冷たくされて、あるいはそういう生活の苦しさになえかねて、一家心中という事態さえも起っているわけですわね。あるいは国会にオートバイで衝突して、自殺して抗議した人もいるわけですわ。だから、こういう事態が起きている以上、やっぱし、苦しい生活の中からでも、みんなて、手をつないで、力あわせてですね、立ち上がりにやーあかんのじやないかと思えます。

これからも、集団就職というかっこうで、大阪へぎょうさん来ますけども、そういう弟や、妹たちを迎えうるだけの態勢を、今からでも遅くない、つくっていかうではないかと。

僕はそう思うています。これからもみなさんと、共に頑張っていくたいと思います。

△山本V 私には沖繩出身ではないんですが、広島で生まれ、ここまで来た訳ですけど、今、日雇労働者です。

たのは広島を出て東京の大学に行ってそこで大江健三郎の「広島ノート」を読んで、はじめて、「あー俺は広島の人間なんだと気づかせる、そういうった様なものが、最近沖繩からこられた人達には、何かあるんじゃないかと思っんですね。そういうった声が聞きたかった訳です。どうもうまいこと言えないけども、そういうふうに関西には沖繩から来た人達が居るということを新たに言っておきたかった訳です。

△津嘉山政栄V これから話すために、ぜひ聞いておきたい事があります。

皆さん、すみませんがウチナーンチュの皆さんは手をあげてもらえませんかウチナーンチュというのは本籍地がどこにあってもかまわな。沖繩の本島であるうと、離島であるうとお父さんやお母さんがどこで生まれようとかわらない。とにかく、おじいさん、おばあさんが沖繩の人は手を上げて下さい。(ぼとんど手を上げる)その手を上げた方の中で、大正区で生まれた方、よくいう二世の方は手をあげて下さい。(五・六名手をあげる)ご覧下さい。

ここに居るウチナーニースータ、良く考えて下さいや。何万人いるウチナーンチュのいる大正区で、この集会でたったこれだけしか来てないんですヨ。私はあかんなあーあかんということを痛節に感じます。私は中学校で

特に、今まで話された事から、もしかすると、たとえば、私まだ大阪へ来て間がないんだけど、この間、日雇労働者として、いわゆる釜ヶ崎、西成ですネ。それから大阪市内あっちこちにある、そういうった所で沖繩出身の青年に何人か会ったので、そこで話してみると自分自身何かやるうとしてるんだけど、結局どうして良いかわからない、そういう青年達が居るとい事も、今日の集会ではそういう視点がちょっと落ちていたんじゃないかなと思っただんです。

ご存じだと思うんですが、西成なんかで生活し、高老死する人間、行き倒れて死んで行く人間が年間三百余名いる訳です。そういうった状況に追い込むのは、何か？というものをもっとつき詰めて考えていかんと、やっぱり永久に福祉の谷間ではないもんだという事になんてしまいう。そういうったところへ追いやられていく人間というものが、現実にいるんだという事もやっぱり考えて行かなあーあかんのじやないか。もっと言えば、ここでさつき発言された方々は教師だとかそういうった方々だと思うんだけど、もっと現場労働やっいて、一日中騒音の中で生活していて、その後で自分に対して沖繩とは何なんだと問い続ける人達の声をもっと解放同盟として取り上げないあかんじやないか、という気がします。

私自身、広島出身ですが、私が広島というのを意識し

五人に一人の割合で、名前を聞いただけでウチナーンチュの子という事がわかります。それであるけれども、ぼんとに沖繩のことについて、知っている子は実に数えるほどしかおりませんよ。この集会にはウチナーニースーターがヨークーいるけれども、だけどナー、二世、三世は五名しかおらん。一体これは何やー。何でお父さんお母さんは沖繩のことを教えて下さらなかつたんや。何にも言っていない。

「私は沖繩の歴史はあんまり知らんデー」私の知っている人が言いました。その人は会社の社長ですよ、二十名位使っている。「津嘉山君、君はあんなに沖繩の歴史を教えないと言っけれども、運玉ギルとアンラケーボージャーしか知らんデー、だのにどうして君は沖繩の歴史を教えると言っのか」「いやワッンが言う、歴史というのはこうじやない。我家の歴史を大阪に出て来らざるを得なかつたのはどうい事だったのかをネ。こういう歴史を、なぜおじいさんやおばあさん、お父さんやお母さんが沖繩でどうで、こうあつたんだヨという事を教えたら」とこたえた。そうしていたらこんな以外なことはなかつた。

というのには、たくさんのウチナーンチュが大阪にやって来た。これはネ第一次世界大戦のあとでやってきた世界恐慌の大正十年から昭和五年まで最初に出てきた。

大正にヨーキーおられるその人達の孫がいま、中学校の子供達だと。しかしその子供がほとんどウチナンチュという自覚がない。だから大きくなってこういう集会があっても来ませんネ。だからまず我家の歴史をまず子供に教えましょーや。これは非常に重要なことです。

もう一つ、昭和一八年頃、三重県の国民学校に行っていた時に、教える事、やる事なす事、沖繩の国民学校と三重県の国民学校となんにもかわらなかつた。ただビックリしたのは「ヌーアンシヤマトはアンシ、金持か、逆に言うたら沖繩がなぜあんなに貧乏だろうか」と思った。あの時の三重県の農村と沖繩の農村を比べたら、もう段違いですネー。私が独身時代に下宿していた農家は国頭郡でも指折りの大金持ちですヨー。それが三重県の農村と比べたら中位しかないじゃないですか。だから思った。二ヶ年して田舎帰えたらなぜ沖繩の農村があんなに貧乏なのかという事をやる為に農業協同組合を学んで帰えろろと思う、とにかく沖繩は貧乏だから、と。それが、今でも続いている。それだけ、報告しておきます。

△宮平君▽ 津嘉山先生の発言に対してですけども、我々沖繩県民が差別されてきたものに対して敵対する相手と言うのはやはり行政である訳です。日本政府が我々沖繩県民に対する差別を余儀なくさせてきた訳ですネ。我々の闘いはやはり行政闘争を絶んで行かナーあかん訳で

がたいと思いますよ、ヤマトンチューの皆さんに文句はとんでもない、言いませんよ、ただ問題はネ、今日の集会でもわかるように二世三世が非常に少ないという事は、この大正区に四十年・五十年住みついた我々ウチナンチュのどっかに欠陥があるということ、ワシが言いたいのはこれなんです。そのウチナンチュ達が立ち上がらない限りね、解放同盟と言うたところで、始まらんよ、我々はここをよーくかみしめて覚悟してかからんと、簡単には出来へんでー。そう思います。

△司会▽ 今日、関西の準備会として、新里金福氏をお招きして集会をやった訳ですが、この意義というのは僕から言うまでもなく皆さんも良く感じている事だろうと思うんですけども、沖繩が「返還」されて以後、こういう集会がなかったという事と、やっぱり返還以後こういう集会をもって僕は非常に意義が大きかったと思うんです。その他、内容としましては年輩の方や青年達が自分の苦しみや悩みを出してもらって、ほんとに沖繩問題は終ってないんだと、沖繩の問題はまだ根深いんだとしみじみと皆、感じたと思うんです。

それから二番目には今まで沖繩から「連行」されて来て、あっち行ったり、こっち行ったりして、色々なしんどの生活をしてきた我々沖繩人が一人一人手をあわせて、この矛盾に立ち向って行こう、そして沖繩の差別と迫害

すよ。と言うのは我々の労働条件なりあるいは住宅問題なり教育問題等は行政とからんでいる訳です。その背後関係を明らかにする為に、やはり皆と共に闘って行かナーあかんと思う。その前にやはり沖繩出身者ももっともっと団結せなーあかんし、僕は部落解放同盟で学んだ事は部落民だけが抑圧されて、行政闘争はしない訳ですわ。部落解放同盟は一般大衆に呼びかけている訳ですわ。労働者に対してはね。我々はこうして差別されてきた、と。だから我々が沖繩解放闘争の中で、ヤマトンチューが入って来ても、それが変革された人間であれば賛同出来る訳ですし、迎え入れて基盤を広げていかなーあかん訳ですネ。だから、ヤマトンチューやから殺せ、とか、あいつ等は歴史の上で我々を差別してきたから絶対あかんのや、と突き放す問題じゃない訳ですわ。だから我々の解放を助けてやるのか同情ではなくて、お互いがその変革に基づいての運動であれば、やっぱり大衆基盤になると思います。だから、先っきの津嘉山先生に具体的にもうちよーと聞きたいと思えますが。

△津嘉山▽ 私は要するに自分で立ち上がらナー、結局何にも出来ない、自分が立ち上がろうとして助けてくれーやったら話はわかるけどね。自分で立ち上がらないで、ただ助けてくれーだったら話にならないネー。私はね、ヤマトンチューの皆さんがヨーキーみえるという事はあり

からの解放を一人一人が立ち上がって闘いとして行かなければならないんだと、感じあったんではないかと思う訳です。そして三番目に、そういう闘いを単に頭の中で展開して行くんじゃないで、広く沖繩の兄弟姉妹が在住している地区を中心にして、大衆的な基盤から、大衆の、住民の側から運動を起して行かなければならないと、そして、更に大衆の運動じゃなくて、現地沖繩で起っているもろもろの問題に対しても、僕達も現地沖繩の闘いに呼応して、連帯して、関西の地で沖繩一本土を貫ぬいた沖繩解放の闘いを起こさなければならぬんじゃないかと思うんです。

その三点を僕は非常に感じた訳です。そして最後に今まで迫害の中で、グチグチしていたウチナンチュが生き生きとしてウチナンチュらしく、ウチナンチュとして誇りを持つような運動を一人一人が築きあげて行く事を最後に皆さんと誓い合いたいと思います。あまり良いまとめではなかつたですけど今日の集会をふまえて、また、明日からの地域、職場での運動、学園での運動を通して、またもう一度皆さんと共にこの沖繩会館で参集して、具体的な闘いを行なっていききたいと思っています。まだ出来たばかりで、通信等も不便をきたすと思いますが、極力、皆さんの力になるよう、沖繩解放運動のため僕等も頑張って行きたいと思っておりますので、よろしく

お願い致します。締めくくりとして、ヒヤミカチ節を歌  
って閉会とします。どうもありがとうございました。

10  
。  
30  
関東謝花祭

於 川崎・産業文化会館

△司会 池宮城▽、かなり遅れましたけども、10・30 関東沖繩解放同盟主催による謝花昇祭をはじめたいと思います。謝花昇の六五周年忌は、ほんとうのところは昨日の10月29日なんですが、川崎の方では月曜日は公会堂が休館になるので今日にした訳です。謝花昇の問題についてはこれから関東沖繩同(準)の委員長の方から、そして関西の部分の方から、それぞれの立場からですね、如何に評価し、いかに乗り越えるかということについてのそれぞれの発言があると思いますし、また自由討論が一時間ぐらい設けてありますから、それぞれの発言者の発言に踏まえて自由討論の場で、参加者の方から自由に各自の意見を出していただきたいと思えます。で、一応沖繩解放同盟準備会の性格について、若干なりと説明しておきますと、実は10月25日に、関西においても集会がもたれました、関東における沖繩人集落地である川崎とか鶴見と同じ様を大阪の大正区、四、五人の内ひとり沖繩人であるという沖繩人の労働者の街で、その沖繩人会館において一五〇名を集集して成功したわけです。解放同盟としても、川崎における、東京の方からみれば随分不便なところで、まだまだ結集が遅れているんですけど、この集会を第一歩としながら関東の地における、とくに川崎・鶴見という沖繩人の集落地において沖繩解放闘争を断固として闘い抜いていく、で集団就職の方とか、それ

からおじいさんやおやじの代に、ここに集団就職にきて住まれた方がいるわけだし、やはり沖繩解放闘争というのが単に「基地撤去」とかいうふうな外在的に捉えるのではなくして、沖繩人自身の自己解放を闘いとる、具体的に地域的・行政的に、或いは経済的に政治的に社会的に加えられてくるところの差別に対して徹底的に闘い抜くということを軸に据えながら、「一五・一五」以降、海洋博のなかで、土地を奪われた農民や、職を失った労働者が続々と沖繩をたたき出されて、縁故、知縁なんかを頼りにして、大阪だったら大正とか西成、尼崎、そして東京では川崎・鶴見なんかに来ざるを得ない、そしてそこにおいては差別がまわっているという現実があるわけで、ある意味で、沖繩青年の犯罪が本土マスコミの社会面を「にぎわす」とか、乃至はそういう様を現状で今年の5月20日には上原安隆さんの国会正門へのオートバイでの激突による抗議自殺という事態がうまれているわけだし、やむにやまれぬ、「一五・一五」以降、「海洋博」を軸にするところの沖繩と沖繩人に対する差別支配にたいして徹底的に闘うということと今日の集会を全体としてもっていきたいと思えます。ということで一応、司会としての挨拶にかえたいと思います。それでは続きまして関東の沖繩解放同盟準備会を代表して委員長眞久田君のほうから、経過報告と若干の提起を受けたいと思



ます。

△真久田正△ 本集會に参加されました沖繩の兄弟姉妹の皆さんに対して、関東沖繩解放同盟準備會を代表して、本集會を開催するにあつての基調と、同盟準備會結成及びその公的登場としての本集會開催に関する経過を簡単に報告したいと思います。

まず、何はともあれ、我々は、我々とそして全ての「日本」本土に働き学び、生活している沖繩出身の兄弟や先輩諸氏の共通の夢であった沖繩人民自身による大衆的な沖繩人民のための組織の建設に向けて、10月25日大阪、大正区の沖繩會館における関西沖繩解放同盟準備會の結成と、その社会的登場の感激的な大成功にひきつづき、関東において、今ここに、こうして登場せんとしている関東沖繩解放同盟準備會の第一歩が踏み出されていることを、全ての沖繩の兄弟諸君と共に、はっきりと確認したいというふうに考えます。そして本集會の基調報告を共に確認し、本集會を最後まで貫徹し、そして成功せしめるならば、我々は必ずや今後の「日本」におけるあるいは、「日本」として沖繩を買ぬく沖繩解放闘争の新しい一歩を踏み出すんだということをはっきりと確信するものです。そういう確信の上に立って簡単に本集會の主旨を述べていきたいと考えます。

近代沖繩の歴史の重大な曲り角としてあつた七二年「情勢、あるいは世界の情勢に目を向ける必要があると思ふわけです。

スエズ、シナイ半島をめぐるシオニズムイスラエルと、アラブ諸国の戦闘は続き、千数百年來のアジアの王国、タイ国軍政權が赤ハチマキの学生戦闘団に制圧され、転覆されたのが最近です。あるいは、また世界で最も政權を有する期間が長いといわれている朝鮮南半部のポナパルティズム朴政權は、金大中事件に端を発したソウル大学学生等々の軍政權打倒の闘いによってすでに、崩壊しかけています。人類の歴史はじまって以來ヨーロッパ、アメリカの諸列強国の植民地支配の下で呻吟せしめられ最も遅れた後進国といわれたアジアの諸国は今最も進んで社会主義建設へと向って動きはじめています。こうして社会主義の陣痛に激動するアジア情勢の中でベトナム人民の民族解放闘争に敗北したアメリカ帝国主義は日本帝国主義と結託して軍事的には、アジア人民の解放革命闘争に敵対する侵略反革命同盟の攻撃拠点として、また経済的には、日本の中国、東南アジアに向けた資本進出のための拠点として沖繩を軍事と産業の密着した基地の島に化さんとしているわけです。実はこれこそが「海洋博」の意図するものであり、その目的だと思ふわけです。「海洋博」を企画する海洋技術審議會に重要メンバーとして防衛庁が加わっていることや、

沖繩返還「以降、我等が沖繩が「日本」とアメリカの結託した軍事支配の下で、いかに苦しめられ、いかに疲弊と貧困のどん底へと落ちていっているか今や我々が述べるまでもなく全ての兄弟の皆さんが承知のことと思ひます。現地沖繩においては依然として広大な、米軍基地が居すわり続け、自衛隊派兵の増強によって今や沖繩は完全なアジア侵略のための基地の島と化さんとしています。その上日本資本の一挙的をなだれ込みによるインフレや土地投機に端を発し、農民の土地は買い占められ、キビ作農業は、破産せしめられ、O.T.S.関連等によって漁民は、漁業で生活することができなくなり、全軍労に代表される基地労働者には大量首切りの合理化攻撃がかけられています。そして「日本」とアメリカの結託した軍事支配の下で、日本で生活している我々には目に見えぬ形で沖繩の疲弊とソテツ地獄が進行しているわけです。「海その望ましい未来」「平和で豊かな沖繩開発計画」などという甘い文句でお祭りによそわれた、この「海洋博」、これこそは、沖繩人から沖繩の全てを奪いつくして「沖繩返還」以降の沖繩支配を完成せんとする、日本とアメリカの軍事同盟の沖繩政策の主眼として計画されているわけです。この様な日本とアメリカの結託した沖繩支配と「海洋博」計画は一体何を目的とするものなのか考えてみると、まず我々はひとたびアジアの

沖繩の自然がどの様に破壊されようが、海底基地や海底資源の開発は絶対にやるとしているO.T.S.関連の誘致、等々含めた一切の計画の全貌を見るならば、「海洋博」がたんなるお祭りではなく、また大阪「万博」や、東京「オリンピック」等々とまったく同質のものでもなく明らかに日本のアジア侵略反革命のための海底軍事戦略のうちかためと、釣魚台列島の略奪、軍事産業の密着した基地作り、観光資本をはじめとする、資本進出のためにあることがわかると思ひます。

こうして着々と準備が進められている「海洋博」計画を我々はただ黙って見ているわけにはいかないんですけれども、しかしながら我々はまたそれをあれこれとおしゃべりして「海洋博」粉砕を叫ぶだけであってはならないというふうに考えます。「海洋博」問題は特に我々沖繩青年の身の回りに及んでいるわけです。すなわち「海洋博」を軸として進行する日本帝国主義の沖繩支配を背景として沖繩では職を見つかることもできずやむなく島を離れこの日本へ渡ってこざるをえない、すでに戦前の「さまよえる琉球人」のごとく流民化する一歩手前にある、沖繩青年兄弟が続々とでてくるわけです。こうした中で、上原安隆さんやあるいは比嘉さん、あるいは前黒島さん等々の自殺などにも明らかのように、ほんとうにすざましいばかりのすてばちな事件が続いているわけ

す。現在ですらこの様に悲惨な現実を強いられている沖縄人は、この上、「海洋博」事業が終わった後どうなるのでしょうか。関連施設はほとんど軍事目的に使用されることが決まっているようですし、今は一定関係工事で収入を得ることのできる労働者や土地を手ばなした農民も一ぺんに島からたたき出されてしまう以外にないわけです。これは決して偶然にそうなったというレベルの問題ではなくて明らかにゴザ暴動や、5・19、11・10、あるいは皇居突入闘争や国会内決起闘争、東京タワージャック闘争等々、日本一沖繩を貫く沖繩人のずぬけた戦闘性をおそれる、日本政府の意図的な沖繩解放闘争の芽を摘みとり事前に弾圧せんとするその様な悪らつな陰謀であると考えられるわけです。

朝鮮南部人民を安価な補充労働力として沖繩へ強制連行することを伴いながら、沖繩人を、沖繩の土地と職場から切り離し、日本の底辺一使い捨て労働力として差別のわくの中に閉じこめようとする、または自衛隊要員として、差別収奪せんとする「海洋博」、その化け物の様な「海洋博」の攻撃を我々は、決して許してはならないと考えます。こうした緊急に問われている「海洋博」粉砕闘争を中心として在「日」沖繩青年の諸課題を真剣に考えるならば、我々はこれまでの新旧左翼の悪しき傾向をのりこえて圧倒的に未組織の沖繩青年を広範な大衆

組織へと統一しつつ「日本」一沖繩を貫ぬく、沖繩解放闘争の前進を断固として克ちとっていかなければならぬと考えます。この様な基本的な認識にたつて多くの兄弟、先輩諸氏のあたたかい指示と共感を得て、我々沖繩青年は七〇年代沖繩闘争の高揚と低迷の中で混乱に混乱を続け、組織的細分化と個人的活動を余儀なくされてきまべく努力を重ねてきました。そして今我々は沖繩青年の誇りと革命的情熱にかけて、すべての兄弟姉妹の皆さんに関東、関西を貫ぬく沖繩解放同盟準備会の発足が待ちとられたことを報告したいと考えます。

関東傘下においては未だ多くの問題をかかえているのが現状ですが準備会のそういう状態の中ですべてがもろ手を上げて喜べるものではないにしてもたんなる共同闘争の機関としてはなくてはならない強固な同志的、兄弟的結合と単一に統一される沖繩解放同盟の創建を我々は多くの沖繩青年と共に歩んでいきたいし、又、それに関するそれに向けた闘いが今、強く要請されているだろうと考えるわけです。「海洋博」に対する全ゆる部門からの闘いを、共同で取り組むことを通して関西沖繩解放同盟準備会の同志諸君の関西における、働く沖繩出身者の組織化と山口君裁判闘争に連帯しこれに学びつつ、関東沖繩解放同盟準備会は、沖繩青年同盟と、沖繩解放同

志会を中心として、広く沖繩青年に開かれたものとして存在し全体の利益と個々の党派フракションの利益をセクト的に処理せず、革命的かつ、民主的に止揚させる立脚点にふんばって闘う決意です。そして、とくに関東における沖青同と同志会はこの間の組織的關係や、おのの活動の総括を準備会、運動の中に反映せしめ、全ゆる困難、障害、失敗、不信を、沖繩解放というこの大義が我々に与えた試練だというふうにかけて、それを主体的に受けとめ克服し、プロレタリア国際主義の旗をかかげ、沖繩解放闘争の新たな展望を、切り開いていくことをはっきりと決意表明し、簡単な解放同盟準備会代表としての基調と本日の集会に関するあいさつに変えたいと考えます。(拍手)

△司会△ それでは引き続きまして、ただいまの基調報告にありましたように、この集会に先だってもたれた、関西における、関西沖繩解放同盟主催の集会を中軸になつてにないきつた、関西の大正区で保母さんをなさつておられる比嘉さんの方から関西沖青同を代表しての発言とあいさつをうけたいと思います。

△比嘉△ ではあの、関西を代表して関西の方の報告を行ないます。関西では去る二五日に、沖繩解放同盟準備会、関西準備会ですね、の主催で行なわれた、その謝花昇祭なんですけど、ウチナーニーセーターがね、その

オトウもアンマターもいっばい見えてトゥスイヌチャーから一ばい見えてね、その話を聞きにきました。その中でその、先生には悪いんですけどその、謝花昇祭のあと討論を行なつたんです。ところがその、謝花昇祭を離れて、もうすでに関西では生活の場からの提起がね多いに成されて、とてもこう何と何とのか、雰囲気的にも盛り上げていましてね、大成功に終わりました。(イギナシ) とてもこうみんな感激してね、東京人のこうその、支援によって、こんどの二五日の大成功があったんですけど、関西でも不足の部分をおね、行動力がない関西なんですけど、それを補うと今一心になつております。(イギナシ) あのうこちらの解放同盟の方には、その部落解放同盟で闘っている、現に闘っている方もおられます、その方達は実に部落解放同盟から解放とは何んであるかを真剣に学んでいて、これからの沖繩解放はどうあるべきかというのをね、こう、すこしながら私達といっしょになつて関西でもって、で闘っているんです。

で、その中でこう、いろんな問題あるんですけどその、ウチナーンチュイったら関西では二世三世それから、その、ヤマトンチュイの間になつた、沖繩の人間たいへんむつかしい位置にあるんです。たとえば私がこの保育園で保母をしていて、小さい子を見るときに、おとうさ

んや、おかあさんは、やっぱり、その、ウチナンチュなんですよ。子供が何も知らないやっぱりウチナンチュなんです。その私と同じ保母さんしている人にウチナンチュがいて、その人は、おとうさんやおかあさんがウチナンチュであるにもかかわらず、「私はウチナンチュでないよ」というんです。で、「あなたは何んでそんなウチナンチュなのか」「あなたは差別しているって違うか」こういうんです。で、「あなた何人なの」と言うたら、「私は大阪人や」と言うんです。「そんなことありえないやろ」言うて、まあ、話したりしますけどね、なかなか、この彼女の生活が、すごく厳しかったと見えてね、その「おなかがよくから、あなたは動くのやめとき寝とき」と、そういう生活を小さいころから繰り返かえしていた、いうことを聞いてね、実に沖縄のその差別がね、こう身近であるないうことを感じました。まあ、私自身は沖縄でその貧困を味わってきたんですけど、その大阪において、あの、沖縄部落の中で暮しているウチナンチュ、とても差別の中であってね、こう苦しい闘いをしてるいうんで、日々その人達と切り離して考えることができない、こういうのが現在結成された沖縄解放同盟の準備会なんです。そこからの闘いを関西は、やり切ろうじゃないか、いうことで準備会を結成した、その人達が、こう、決意を固めて集って

るわけで、とても欠点は多いんですけどね、これから着々とその欠点を克服していこうかと、関東にね、関東のその行動力には、うちらはたいへん頭が下がる思いです。で、それを見習いながら、その行動力のなさを、こんど、克服しながら、関東で関西で頑張りたいと思います。(イギナン)一応この位で短いんですけど報告を終わります。(拍手)

△司会▽ それでは、あの、引き続きまして新里金福さんの方から、あの、講演をうけたいと思います。(拍手)

△金福氏講演▽ 略！関西集会と同じ。

△司会▽ 新里さんの方から約一時間20分にわたってですね、謝花昇を如何に批判的に継承していくかということが述べられたと思います。冒頭の方で第三次琉球処分下の現在の沖縄人の大半を占めるところの農民が現在抱えているところの具体的な問題をなんか考えた場合に沖縄の全農家のキビ作農家の5万7千の代表が千名ですね、北は沖縄本島の方からそれから波照間、与那国島の、台湾に近いそういう島々の人達、一生土に生きて生命を終

えるそういうふう考えた五〇才から六〇才の農民の方々が初めて東京で決起されて、その半数の大半の方ですが、サトウキビを一本一本担いで東京に上京してきて十一月三日まで闘われて彼らの終ったあとは奄美大島の農民が今度同じ千人上京して闘われるわけだけでも、そういうことを考えた場合に第三次琉球処分における現在とね、謝花昇が闘ったところの第一次琉球処分下の沖縄というものは歴史的に重なったものとしてあると思います。沖縄解放闘争の中において農民の運動を考えた場合に謝花昇が闘い、闘って敗れたところの第一次琉球処分をやっぱり批判的にとらえる中で彼がなし得なかった第一次琉球処分の転覆を第三次琉球処分転覆するということとで吸収しなければいけないんだというふうに思っています。それで、まあ何と言うか謝花昇が敗北された理由としてですね、金福さんの方からあの奈良原繁、時の薩長の全面的なバックアップをうけながら明治27、28年のやっぱり日清戦争のその準備の過程においてその勝利の過程において、日本との強制的な一体化同化教育、公民法教育を含めたそういった様な奈良原なんかの暴力的な統治、絶対的な沖縄支配の中でかつての首里、那覇の旧琉球支配層がね、公同会運動という様な復藩運動といわれているようなそういう運動をおこすことで奈良

原なんかはコピ、しっぽをふってへつらい身をすりよせて売弁家になっていくという中で、一つの証しとしてね、彼らは奈良原に全面的な叛旗をひるがえして闘いぬいている謝花に対して沖縄倶楽部に結集するところの沖縄青年に対して徹底的なその誹謗中傷を含めながら弾圧を加えるという様な、沖縄の魂を失った沖縄人の問題があったということ、それから第三に謝花自身の問題として金武の移民運動と言うか、沖縄農民を圧倒的にこう中南米それからアメリカのハワイなんかにもっていった農民運動、第一次琉球処分下における農民の疲弊、農業問題なんかを農民移民という方向で外に打開しようとした当山久三とまあ比較した場合に明らかに何ていうか農民との接触点が弱かったというか、土の臭いが余りなかったというふうな点が指摘されたと思うんです。で、あの太田朝敷なんかの旧琉球新報によったところのそういう運動を考えた場合にやはり第三次琉球処分を全面的に転覆していくというひとつの立脚点として立場としてですね、我々は沖縄人として沖縄の歴史、沖縄の精神、風土をね、その革命的な可能性に断固としてふまえながらやっぱり闘いぬいていくことが決定的に重要であるということ、まあ指摘されたと思います。それで一応こは九時までなんですけれども、新里さんの講演に対する疑問とか、意見とか或いは反論ということも含めて発言がありました

たらということ、あのこの第三次琉球処分下の現在、農民の一千名の決起に代表される様な決定的な事態の中で、まあ何かひとつの提起を含めてですね、全参加者のうちで発言していただけたらと思います。

△富村V えー最初に申し上げたいことは私は今後は革命家でも何でもありません。一切の私を支援してくれただけの方々にあつたわけです。これは沖繩人であるならば当然助けるのはあたりまえです。私は許す限り沖繩の女性のめんどうをみました。第一回に沖繩に帰ったときです。私は現金はありませんでした。金を借りてきて私は、中核派のZ君という人から借りました。この沖繩の女性にやっただけです。果たしてこの娘たちを追い出す場合には何もやらんで追い出していいのか。私はそのKHTさんの所に一ヶ月、ZHさんの所に一ヶ月預けた。月謝はまだそ

は自分たちの被害意識をもつ。じゃ自分達は何をしたかと冷静に判断する必要がある。私は今「慰霊の塔」を造るために一生懸命やっている。それだけはやる。だが沖繩人なら沖繩人であつて闘争を進めてもらいたい。それには沖繩人としての兄弟愛があると思う。今、真久田君や金福先生のお話があつた。この主義主張は立派。これは誰も批判する事はできない。これを批判すればおわりです。彼等が沖繩人としての生きざまをほとばしらしたこの信念を批判したらおわりです。おそらく沖繩人であれば批判できないだろう。沖繩人であつてこそ地球人なんです。日本人なんです。もし沖繩人も日本人と主張する人間がいた場合においては沖繩人であつて日本人であつてもいい。

私とはつべんであり皆さんのように学校も行ってないから、皆さんの御理解を得るため話すことはできません。だがしかし言っておく。沖繩語で、トシヌクーンカミヌクーンヤンドウという諺がありますね。ありませんか。確かに若い人は立派な学問をして主義主張は立派にする。それは当然です。それは当然、しかし、もし、年の功も亀の功と言わない若い人がいたらダメです。私が年だからと言つて無茶なことを言うんじゃない。また言つてもいけない。年だからといって大きなことも言つてはいけないが、本来私は沖繩の若いのが好きなんです。よく年

くくりと括つてありません。これが沖繩人なんです。あくまでも沖繩人でありたい。第二点革命も必要です。人間であつてもいい。何故私はこういう事を言うかといえは実は私は九月八日に北海道へ行って自殺未遂しました。四日間動けませんでした。私をすくつてくれたアイヌ人がいました。私は助けてもらつて北海道から東京に帰ってきました。そこには人間としての愛があるのです。アイヌの人間、沖繩の人間、無論本土人も日本人も人間なのです。革命を叫ぶ前に人間であつてもいい。その理由はいくら申し上げてもあとがたたない。女性には女性の権利、男性には男性の権利があると思う。

私のはっきり申し上げたいのは、お前何ニヤニヤ笑っているんだ、敵にまわすんだよ、富村の、確かに今後の闘争で沖青同、沖青委は富村に続く闘争と言つた。これは非常にありがたいと思つている。国会闘争も皇居も立派に評価すべきです。だが人間性を失なっちゃいかん。なぜ沖繩の人間が差別され、しいたげられ、いじめられて初めて闘争というのか。革命は相手の人権を尊重し個人個人の基本的人権があつてこそ革命ではありませんか。隣の人を愛することができない奴がなにが革命か。確かに私は今後一切この様な運動にはタッチしたくない。やはり長屋の与太郎、学校に出ないで与太郎は与太郎ですごしたい。だがやりたいことは一つある。よく沖繩人

寄り。今日は若い者はといつて話をしますね。今日の若い者こそ自分の意志でもつて自分の主義主張、自分の行動を決定する。これは立派ですよ。だがしかしまたこれは沖繩人であることを言つた場合においては全ての面において日本人とは相反する所が出てくると思う。だが私は言わんでしょう。沖繩人は非常に可愛い。可愛くてあたりまえ。遠くの人を愛するよりは近くの人を愛したい。私は一切の左翼の運動との関わりを拒否するであろう。だが自分で慰霊塔をつくるため自分の意見をするためにやる。そのかわりお世話になる時があるかも知れない。だが人間であつてもいい。革命も大事。人間性を失なっちゃいかん。私は今結婚しています。アイヌの人とお互い何も知らない。向こうはお情け結婚かわからない。食うメシも変わる。料理の仕方も違う。だが本心に虐げられた者は虐げられた者の気持ちがかかると思う。自分の女房をほめるといふのもちょっとおかしい。非常におかしい。ほめてはいけない。彼女は多くの本に色々書いています。またインディアン闘争にも参加している。そういう人であればこそアイヌ解放運動ができるのです。

△比嘉V ウチナーワラバーターを見てね、何やらこう自分としてこの子らに沖繩ということは何かどう教えるにゃあかん。どうしていかうかと私なりにそれでやっばりまずこの沖繩を代表するゴーヤーをねゴーヤーを、ニガ

ウリです。ね大和語で言うと。そのニガウリを北恩加あたりからね、沖繩部落といわれる所にワーツとありますからそれをちよいとくばらってきてそれでこれをサツと並べてね、ちよっと部屋の中にズラツと並べるんです。これなんですとかこう子供に聞くんすね。そしたら子供が何かなあと言うわけです。それで、これはゴーヤヤと教えてね、すると、ゴーヤヤという反響が返ってくる訳です。で、こういう風なことか、それから絵本を見せて、で、それが沖繩の人が書いた絵本なんですけどそれが船引きタラーとかヘコキサンダーとかありますね、ああいうのを読んで聞かせてその中で言葉が出てくる訳なんです。「アリヒャー、マールンブニヌ、イッチェンドゥ」ということ、そのポーズがね、その絵もかっこいいんです。こう手を上げてこういうふうな感じでね。で、太陽を指さしているとか、マールンブニーが今、飢えている私達のために物をもってきてくれるんやでーという感じの絵本なんですけど。そのアリヒャーと言ってごらんと言ったらまたすぐく反響がでてきてアリヒャーとこう言うんです。そういうことを何度もやってるんですけど、これはこう、実際ね、あの子供を二才の子供を見ているんですけどその沖繩に行き来の激しい家と、全然沖繩ともう親せき関係ももう住んでなくてみんなここにきているという人間と、いろいろ

あるんです。で、沖繩に現在その自分の兄弟とか、親兄弟とか何とかが住んでいるんやったらねその子供はね、沖繩に行くんやでーとこういうんです。「沖繩に行くんか」「じゃ一緒に船で帰ろうな」「いや船じゃあかん、飛行機で行くんや」こういう話もできる位にね。こうなっているんですけどね。これからもまあ私のやることを言ったらこういう子供たちを通してね、何だか子供達の中に沖繩が芽ばえたらなということですね。それを通してその子供を通して親との接触があるんです。親にね、こういうことを言ったことがあるんです。あの国会決起の話なんですけどね「国会決起のあれでね言葉をウチナードでね言った人がいるんです」とこう言った。したらこのお母さんが「何であんなことをするんかあーあんな事をしなくてもいいのにね」と、私は黙っていたんですよ。で、あれから「あれはともいいたいと思うんですよ」いう感じでね、ニコニコ笑いながらそういう会話の中でお母さんたちがどういう風な事を考えているのかという事で聞き出してみるとここに十年もいるけど友達がいってへんという、さみしいわーと、あなたが友達になっただけでね」とこういいますね。そういうのとかいろいろあって、またこう「沖繩いうお母さん、お母さん沖繩の人ね」「え」言うて「私ウチナートンチュジャない

ゆうけどお母ちゃんどう思うねえ」ときいたら「何でねえわったあ沖繩人だにそんなほこりすてたらあかんおもう」と、とうとう話してくれて、そういうになつたらそのお母さん実は二世なんです。全然沖繩の現実も何も知らない、沖繩の終戦直後出てきて、でもだんなさんが沖繩からきただんなさんをもらってね。これも何かの縁であつたんやろうと話をしてくれてね、やっぱりなんか故郷の人は故郷の人と結ばれるんやないのかなーと言ったりしてしまってます。で、そういう話をしたりして大正区内ではね、一応子供を通してその父兄との接触、親達との接触、沖繩人との接触、これを私は今やってるんです。それをまあ一応沖繩解放同盟に役立てたらどうかと思っっています。(拍手)

△司会▽ 只今の比嘉さんの発言というのはあの先程ね、新里さんの方からあつた同化問題というかどんなに沖繩の歴史なんか識っても、あるいは自分は沖繩人だと言ってもサツマの琉球侵略以降のね、日本の同化教育の中で我々はがんじがらめにされて自由ではありえないというふうな問題があるわけで、そういう中で沖繩の二世、三世の問題というのは沖繩の主体性、沖繩の精神風土とか沖繩の歴史なんかにふまえて沖繩人としての自覚、沖繩人としての誇り、沖繩人としての使命感そういうものをまあやっぱりとりもどすということが今一番問われてい

るような問題としてあるし、保育所の中においてですけれどもそういう沖繩二世三世の弟妹に対してまあいろいろな教材、ゴーヤーとか船引きタラーとか使いながら沖繩人としての自覚、自信、誇り、使命感なんかを獲得していくことについてはやっぱり決定的な問題としてあるんではないかと思えます。で、真久田君の方からありましたけれども海洋博以降、土地なき農民、そして仕事を失なっていたところの労働者がかろうじて沖繩において生活できているのはあつた「海洋博」関連の土木事業でできているわけなんですけども七五年の海洋博が終了すると基本的に「本土」にね、農業政策が完全に放棄されていますから「本土」へ低賃金労働者としてたき出されるといふそういう現実があるわけで、そういう沖繩人の本土と沖繩におけるあるいは世界における存在なんか考えた場合にですね、沖繩人としての誇りはどこ場所においても持ち沖繩解放闘争を闘いぬいていくと決定的に重要だと思えます。それにふまえて発言ありましたら、徳田さんなんか発言ないでしょうか、できたら、新田さんじゃお願いしたいんですけど、何か、この前あの熊本の方へ疎開されて、で、熊本の疎開地における問題なんかちょっと出してもらったらいいと思えます。ぜひお願いします。

△喜友里▽ えっと、僕は沖繩戦線の中で、今まで闘っ

てきたのですけれども、いわゆる沖繩闘争いうたら、沖繩の二世三世の問題はすごく欠落していると思うんですよ。例えば僕は関西で育ったんですけど、関西に僕自身二世ともまたウチナーチュともいい難い存在とに自分自身があって、はっきり判らないことがあるんですよね。僕は小学校の時、関西に家族ごと引越してきたんですよね。沖繩の人が多い尼崎に引越してきて、それで僕とこの家をね、頼って引越してきて、今そこを中心にして沖繩の人達が集まって兵庫県人会の中心的支部としてやっています。僕は「本土」の地に引越してきた時点においてですね、小学校三年だから、まだ10才にもならなかつたんですけどね、やっぱり僕は沖繩に対する差別をヒシヒシと感じたんですよ。それから自分自身の出身地というのを絶対隠していたしね。学校で出身別に統計をとった場合、僕はいつも「生まれはどこだ？」と聞かれたら「南の方」と言っただんですよ、山之口獺じゃないけど、(笑)。南の方いうて、「南のどこだ。」聞かれたら、九州言うたんですよ。「九州、九州と言うても判らない、どこだ。」と言うたら「鹿児島。」言うてね、それ以上つきつめられたら、奄美大島どまりだったんですよ。そこから向こうへ全然いかなかったんですよ。家へ帰ったら、沖繩の人が集まってきたて、酒飲んだら沖繩の方言なんかよく使っていて、僕自身方言知らなかったもんで、

ていました。

東京で一生涯命方言を覚えてたんですよ。大阪へ帰ったときなど民謡ばかり聞くもんで、妹なんかに「歌謡曲の方が良いのにお兄ちゃん帰って来るな。」とよく言われたけどね。しかし妹なんかにも、いやお前も民謡覚え、方言も覚えるべきだ、言っただけ。妹が学校で生徒会関係やっていてね、沖繩のこといろいろ先生などから聞けらしいけど「兄ちゃん、沖繩沖繩いうけど沖繩なんか別にあんまり小さいとこの事あんまりやることない、本土の中で頑張ろう。」とか言うけど、いやそうじゃない、と説得してね、妹も本心に納得して、じゃ今度の生徒会で沖繩の事を言う、ということ、妹にたいしてもウチナーンチュとしての自覚を持って言ってきたんです。自分自身の繰り返してきた本土の中の差別、公然とした、或いは裏でいわれる差別を身にしみて感じてきたし、それに対して卑屈になつたらだめだ、やっぱり僕は沖繩の人間として、沖繩出身者として「本土」にきているわけ、絶対に沖繩出身者というに誇りをもって闘うと思っただけです。また妹達にもその自覚を促さなければと思っただけです。僕の母は沖繩の文化、といつても隔りと民謡がものすごく好きで近所に平気で民謡を流して踊りを練習するんですね。高校の頃母と一緒に県人会のデモに参加したことがあります、母もやはり

民謡なんかなんだ、方言なんかなんだ、いうふうな感じで、学校でも本土の人間になりきろうと努力をやってきたんです。例えば、方言のなまりがあるから、それを一生懸命直したりしてね、それから本土の人に好かれようというふうな行為したりね、しかし一人になったら、もうものすごく本土の人と、こう自分は違うんだというふうな、自分の出身地さえ明らかでないというところが悲しくなる時もありました。関西にずっと住んでいて、それで沖繩の文化、民謡とか方言なんか僕自身あまり興味もなくて、沖繩の自然、青い海、青い空にだけ興味があって、それで高校の頃叔父さんに、沖繩の現実等を聞いて、じゃ僕も沖繩だからやってみようか、ということ、で文化祭で沖繩のことをやっただんですよ。そして本土の人がね、沖繩の人に対して、一億人の日本人が助かるのだったら百万人ぐらい犠牲になれ、と言った時、僕自身怒りを感じたんだけど、どう答えてよいか判らない。妹が三人いるんですけど、妹なんかは全然沖繩のことを知らないんですよ。全部本土で育った連中ですからね。高校時代、沖繩のことをやって、まあちょっと「かっこいい」こともあったんだらうけど、それから卒業後、関西のある組織でやっていたんですよね。東京へ来ても持統 やってただんですけど、なんとなく自分自身の内に沖繩というの 見出せないという状態で、それを繰り返して

沖繩の現実に怒りを感じていたんだと思います。それで僕が高校を卒業して沖繩のことを本格的にやりだしたら「大学をちゃんと卒業してから……。」と言って弾圧してくるんですよ。おかしな話ですが。何故、両親が沖繩から「本土」へ来たのか、そして「本土」で生活している沖繩出身者はどういう状態なのか、また「本土」で生まれた二世三世はどうなのか、このような問題についてもこれから取り組んでいくべきだと思います。関西、関東とくに川崎・鶴見などを中心に沖繩部落があります。海洋博をひとつの軸として、「本土」へ大量の沖繩の人々が流れてくるのが予想されますが、そのような中で僕自身今迄の「本土」での生活を通して、全ゆる差別や問題が出てくることは目に見えてわかる。現在、既に進行しつつあります。僕らは、沖繩を追われてどんどん「本土」へタタキ出される兄弟姉妹たちを、差別され、転職を重ね、犯罪にはしる、或いは一家心中する、といったことをだまっただけで見ているわけにはいかない。僕自身の経験を活かし、この関東沖繩解放同盟準備会に主体的に参加し、沖繩現地の闘い、状況を直視し、「本土」でほとんど孤立状態の沖繩出身者を組織して、みんなを力合わせて、家族にも沖繩人としての誇りを、沖繩の現実を訴えながら、がんばっていきたいと思っただけです。ま

とまりのない話でしたが、とにかく沖繩差別は厳としてあるのであるし、それに対して真向うからぶつかって、自分のなかに失なわれてきた沖繩を取りもどすことから僕は始めてゆきたいと思えます。

△司会▽ 続きまして、どなたか、はいお願いします。

△我如古▽ 関東で闘うひとりとして意見を述べたいと思えます。さきほども二世の方から発言がありました。僕も二世のひとりです。母親がヤマトッで父親が伊江島の出身で、長崎で生まれたわけです。そこで12の時まで暮して、おとうの仕事の都合で沖繩に引越したんです。

その辺が、普通のいわゆる「二世」と違うところですが、12年本土で生活して、若干の「優越意識」みたいなものをもって沖繩での生活を始めたんだけど、しかしながら、高校を卒業するまでの沖繩での生活、この七年間こそ、自分の内に眠っていた沖繩の魂を呼び起こし、沖繩人としての誇りを自覚せしめたということ、このことが今の自分にとって、どれ程重要なことか。沖繩人としての自覚、その誇りなしに、一体これからの人生をどう送ることができなのか!? 自分としては、長崎で生まれ育ったということによる原爆への「おん念」を断固、手離すことなく、それを背負いつつ、沖繩の魂で自己を武装し、沖繩解放の実現のため生き抜きたいと思っています。また、それが自己の一切です。今後、我々の闘いのなかで、

すが。

△新田▽ 昭和四〇年の九月に沖繩から出てきてまして約九年ぐらい住んでいる者です。

僕は、何とこのか、戦前派でも、戦後派でもあるわけです。

第二次大戦中に、沖繩戦が激しくなるということで、昭和十九年あたり、熊本に家族疎開したんです。

当時のおもかげと言えば、迎えるときは、とつても盛大に迎えてくれましたけれども沖繩戦地が激しい情況のもとで、熊本の間は、我々沖繩人に対して、色々差別を行うんです。沖繩からくる者に、沖繩さんとか、沖繩カライモとか言ってからかうんです。

で、そういう中で、我々は学校通っていたわけですけど、やがて、二〇年、戦争が終りました。それから、沖繩の人間が自分の故郷へ帰る、引き上げがはじまったのですが、そのころから、ウチナンチューがスパイをしてアメリカに対してそういう行為をしたから、戦争は負けたんだということ、学校帰り石を投げられたりしました。

稲刈りの農夫が、あの人間は沖繩さんでスパイをした人間だと言われたり、そういう形で色々、差別もありました。しかし、あの時代は皇民化教育だから、やむを得ないと思う。

どれ程の血が流れようと、なおかつ沖繩の血は、このからだを遺流し続け、沖繩の解放を要求し続けるんだということを、みなさんと共に確認したいと思えます。

沖繩現地をみるならば「五・一五」以来、どんな状態になっているのか、海洋博を頂点とする日本政府の沖繩政策は、農民から土地を奪い、労働者から職を奪い、沖繩から、そのすべてを奪いさらんとしている。海洋博がそのテーマに「海」その望ましい未来」などとフザケた文句をおくならば、我々は我々自身の望ましい未来のために、沖繩の輝かしい未来のために、海洋博を粉碎しようではないか!

開始された我々の運動を、現地に築きあげ闘ってゆきたいと思えます。(拍手・歓声)

△司会▽ 新田さんの方からあの昭和十九年にですね、熊本の阿蘇地方に一応学徒疎開して沖繩戦が激しくなる中でね、沖繩さんというか、さんというのはいくさんだと思っただけで、沖繩さんというようにして呼ばれて歓迎されるわけだけれども沖繩戦の敗北局面の中でね、沖繩戦の敗因をやっぱり沖繩人自身が、皇民化というか愛国心がなくて、で、スパイ行為を働いたから負けたという形で差別が加えられるという風な、「貴重」な経験をなされたと思うんですけど、一応残り時間もありませんがそれにふまえて振返って発言をお願いしたいんで

そういう云々には、我々沖繩人として、大変はがゆいけれど、それだけでは闘争はなりたないと思うんです。

当時、熊本では沖繩人連盟というのがあって、引き上げ者のめんどうをみていました。

南方帰りの沖繩出身の帰還兵がたくさんいて、沖繩人がバカにされたりすると、軍隊で差別されたということがあるから、流血の乱闘さわぎがよくあったけれど、そのむこうみずの兵隊上がりの沖繩人たちが中心になって沖繩人連盟をやっていました。

今は、「本土」就職者の問題がありますが、沖繩現地と連帯して、現在関東地方にいる者として闘うことを今後の課題として、僕もまた闘うということで、終わりたいと思えます。(拍手)

△司会▽ 徳田さんが、失礼ながら「ご老体」にも拘わらず、沖繩解放に断固身を投じるべく結集した我々を激励するために参加されております。かつて、大正期の多くの沖繩青年はロシア革命の烽火に魂を揺ぶれながら、何のケレンミもなくコミンテルン日本支部II日本共産党の創建、その革命的实践に沖繩解放をかけて闘いました。

我々は謝花から徳球へと進む沖繩の主体と思想の自由主義から共産主義へ発展するコースに断乎として踏まえねばなりません。「獄中一八年」の試練をくぐりぬけ、北京で客死した徳球の何物をも打ち砕く沖繩魂を復権さ



せなければなりません。「酬われることなき献身」のスコロガンこそ、まさに、沖縄解放を沖縄「本土」を買流して、その世界的任務と使命の完遂を誓う我々のうちにこそ、その苦難の前途を照らす指針としてよみがえらなければなりません。

徳田さんから一言、発言をうけたいと思います。

△徳田博一氏▽ 今日のこの沖縄解放同盟を組織するにあたっての川崎における集会は、実に重大な使命感を持った集会である。この集会において、我々の先輩が、沖縄解放闘争、世界の革命運動に対してどう参加していったかということ、我々は歴史の真実として受けとめていかねばならないと思います。

新里金福君が話した山田有幹等の青年同盟組織が、関西等において大いに活動したということも、非常に有意義なお話であります。また、沖縄人ここにありという、最も国際的にも高く評価しなければならぬ事として、一九二二年一月、モスクワにおいてコミンテルン主催による極東民族大会が開催され、大会には徳田球一、高瀬清等の他、アメリカ共産党日本人部から片山潜、鈴木茂三郎等が出席した。この時徳田球一はコミンテルンから日本共産党の結成を促され、帰国後、堺利彦や山川均、荒畑寒村等と協議し、七月一五日日本共産党創立会議を開催した。これは沖縄人民としても特筆すべき、先輩の

被圧迫民族としての解放闘争を続けてきた沖縄人民であります。その沖縄人民の闘いにおいて、もっとも特筆すべきことは何であるのか。

沖縄におけるアメリカ帝国主義の軍事基地というのは、アジアにおけるアメリカ帝国主義のもとに結集した、アメリカの手先として結成された国々、いわゆる、南朝鮮、南ベトナム、フィリピン、台湾、これらの国々の兵力を沖縄に集結して、そして沖縄において、アメリカ帝国主義はこれを訓練してあるという状態であります。この沖縄における米軍演習のうちの最も激しい演習の一つとして、残波岬におけるミサイル射撃演習というのは、毎年十一月から翌年三月まで、満三ヶ月間というもので、占領当時から今日まで、継続して行なわれた演習でありまして、このミサイル射撃演習とそれに関連するアジアから集まってきた兵力の訓練というものは、伊江島軍事基地を用いて、その訓練をやっていたのであります。それでこの伊江島島の闘争につきまして、日本のいわゆる民主団体・政党等が、伊江島島の闘いの支援をやったわけですが、かえって伊江島島の結集した燃える魂をむしろ分散させるような結果に終わったので、伊江島島民は、このヤマトウンチュの支援というものを実にきらっておいて、ついに本土からの支援はお断わりするという声明を発表して、以来、伊江島島民は、断固として基地粉砕と

革命的現実の一環として、高く評価すべき問題である。

私は去年の九月から十月の始めにかけて、約一ヶ月間、日本各界代表として中国に派遣され行ってきたんですが、中国において、上海の労働者の前において、私が沖縄問題について訴えたことがあります。その当時中国におきましては、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ等の、被圧迫民族の代表がほとんど集まっている頃であって、被圧迫民族の問題については、七億人民を中心としたその解放闘争ということが、非常に中国人民が大きく関心を持った問題でありました。その時に、中国において私は、沖縄問題を上海の労働者階級に演説したのであります。上海の労働者階級の代表は、私の演説に対して、中国の労働者を始め七億人民に誓って、沖縄人民の闘いを支持することを誓います、という答弁を行いました。沖縄人民の英雄的闘争万才、全世界の無産階級・被圧迫民族解放万才、を叫んで、中国労働者の代表が答弁として話しておりました。

この時はつまり、全世界の無産階級・被圧迫民族団結せよ、ということが、中国七億人民の、世界解放の、世界の被圧迫民族解放のスコロガンということになっておりまして、その路線に沿った革命的路線、沖縄人民のこれまでの長い間の闘いはこの革命的路線に沿って続いってきたのであります。しかも沖縄人民は、三五〇年間の

そして、日本軍国主義に対する闘い、また天皇制粉砕の闘いというのは、伊江島島の燃える魂の結集によって断固闘うことを声明し、それ以降は、けっして本土のヤマトウンチュのいわゆる支援というものは拒否し続けて今日に到っている。これは非常に特筆すべき、沖縄における沖縄人民の闘いの一つであります。

もう一つは、伊佐浜の闘いといって、これは嘉手納から那覇に到る間の穀倉地帯、非常にりっぱな、本島における一番大きなたんぼの穀倉地帯といわれたところですが、ここをアメリカが軍事基地として接収するというところで、一年有余にわたる長い間の闘いを継続したのであります。その長い間の闘いにおいて、この村の男子はすべて疲れきってしまったけれど、婦人の、お母さん達の団体がこれに対して徹底的に、伊佐浜を守らなければならぬといって立ち上がって、アメリカの戦車・ブルドーザーの前に寝こんで、断固として闘ったということは沖縄人民の婦人の闘いとして特筆すべき非常に大きな成果をあげるとともに、沖縄人民の忘れることのできない闘いでもあります。

その他に沖縄人民の闘いとしては、コザの闘いといって、その闘いは、沖縄人民の自然発生的な怒りの結集の爆発でありまして、けっして、県労協とか復帰協とかいうものが計画的にやった闘いではなくて、この闘いは、



沖繩人民のほんとの怒りの、ほんとの燃える魂の怒りの  
結集として、アメリカ帝国主義に対する闘いであったの  
です。しかもこれは、軍事基地まで侵入して、基地に多  
くの損害を与えた。また、アメリカ人の乗っていた自動  
車も何十台として焼き尽して、徹底的な闘争が行なわれ  
たということは、伊江島の闘い、伊佐浜の闘いととも  
に、沖繩人民の闘いとして、コザの闘いというものは特筆す  
べき闘いだと思ふんです。最近では、沖繩の島ぐるみ闘  
争として、去年九月、五五ヶ所三五万人を動員して、自  
衛隊上陸阻止の大集会を開いております。

そこで現在しからば沖繩人民労働者階級はどのように  
闘いの火ぶたを切っておるかという、海洋博粉砕、自  
衛隊粉砕、スト権奪還、週休二日制の獲得、この四つの  
闘いを七五年度における春季闘争とともにこれを盛り上  
げて闘い抜くことを、一〇月一日から始まった県労協  
九〇組合五万人の第二〇回定期大会において決議してお  
ります。つまり、沖繩労働者階級の今後の運動につい  
ては、アメリカ帝国主義粉砕と軍事基地全面撤去、日本軍  
国主義と天皇制粉砕、そして自治・自決権の確立の闘い  
が重要だと思ひます。

そこで最後に、沖繩人民にとって当面の闘争は、①海  
洋博粉砕、②自衛隊全面撤去、③石油公害の徹底的排除  
と石油基地粉砕、④農業立県構想の徹底化と実行及び過

疎化の防止、この四点が重要だということを申し上げて  
この集会を盛り上げるために皆さんに訴えた次第であり  
ます。(拍手)

△久貝▽ 謝花昇祭、関東集會に集まられた、沖繩青年  
のみなさんに、私も、関西、謝花祭に参加した一人の沖  
繩人として、前述した人々と、チョット違った観点から  
感想を述べてみたいと思ひます。

関西集會は、会場に用意した百の座布団が足りなくな  
りあわてて予備の座布団を出す程多くの沖繩人が、青年  
壮年、老年、男性、女性を問わず集まり、終始、熱っぽ  
い雰囲気の中で行なわれました。

金福さんの謝花昇の評価、謝花昇の闘いを、現在どの  
ように位置づけるのか、ということについての講演が終  
り、自由討論に入ると、次々と発言者があり、いろんな  
問題が提起されていきました。

発言者の殆んど、日本における沖繩差別について、自  
らの体験を通し話しを進める、自分達が小さい頃、受け  
た差別の屈辱感を、言葉だけでなく、体全体で語って聞  
かせました。

「金城」という小学校の先生は、小さい頃から、自ら  
を「カネシロ」と呼び、呼ばれ生活してきた。「キンジ  
ョウ」でありながら、「カネシロ」としてしか、自らを  
表現できなかった。そのような例は、私だけでなく、日

本にわたってきた多くの沖繩人が、「朝鮮人、沖繩人お  
断わり」の札があちこちにぶら下っている、日本社会に  
住むために、仕方なく、自らの姓名を、「日本式」に読  
みかえたり、「日本名」に改名したりした。そういった  
ことを具体的な例を出しながら、沖繩差別の実態を訴え、  
現在でも、差別・抑圧があることに對し、沖繩人は、一  
致団結し闘わなければなりません。私も教育者として、  
みなさんと共に闘っていきたくいと発言された。

いろいろな人々からの発言がありました。主に話  
された問題は、沖繩の差別抑圧、それと関連して、沖繩  
の子供の教育面の問題、沖繩人被爆者の問題、沖繩人労  
働者の問題、そして、在日朝鮮人、中国人と、部落民と  
の連帯問題でした。私はそこにもう一つ大事な問題が取  
りのこされているような気がした。それは、集會が始ま  
ったその時から、感じました。それは、沖繩内差別につ  
いての項である。つまり、先島、それもとりわけ宮古差  
別について誰一人として発言しなかったこと、それが、  
あれだけ大きな盛り上がりがあり、意義のある集會であ  
りながら、何か、シツクリいかなかった一つの原因であ  
ったように思われる。集會が、始めると、司會者が「沖  
繩本島」の言葉で、話し始めた。そのことは、集會にの  
ぞむ、私の姿勢を若干なりとも、意気消沈させた。発言  
者の殆んどの方は、部落民、朝鮮人問題については、詳

し話しますが、沖繩現地においても、「在日」におい  
てもある、先島差別については、誰一人として語らない。

沖繩問題は、本質的に、国際的、インターナショナル的  
である。沖繩社会を、破壊する基地への闘争は、全世界  
人民の反帝闘争との連帯であり、沖繩基地が解体されれ  
ば、世界の帝国主義基地解体と直結します。つまり、沖  
繩人民解放は、日本人民解放のみならず、世界人民解放  
をも意味するのです。そうであるからして、沖繩人民の  
闘いは、重要かつ困難な闘いである。その闘いを押し進  
めるには、自らの足元をも、しっかり見つけなければい  
けません。自らの足元を見ず、遠い所だけみていると、  
それは目標に近づいてもすぐ足元から、くずれ落ちます。  
沖繩内に厳然としてある差別に對しては、無知、無自覚  
で、沖繩差別を、日本人民に訴えたり糾弾したりしても、  
私にはシツクリいかない。権力は、人民を支配する為  
に、人民分断政策を行う。それはこれ迄の歴史が語ってきた。  
そのことについてはふれませんが、沖繩と先島の現状  
を、そのまま残すならば、それは、沖繩解放に大きな、  
妨げとなるにちがいない。私達宮古青年は、未だ宮古差  
別がどのように発生しどのような経過を経て、現在にい  
たっているのかについては、完全にとらえていませんが、  
今后、いろんな場でもって提起し、討論をふかめていき  
たいと思ひます。無内容を発言になりましたが、一提起

にかえたいと思います。

△司会▽ 結集されたみなさん。本集会が大日本民族主義者の陰然、公然たる敵対を断固としてはねかえして最後まで防衛され貫徹されたことを確認したいと思います。

又、沖縄解放運動が地理的概念としてこの「沖縄」に自繩するものではなく、階級的な、世界史的内容としての「沖縄」と「沖縄人」に踏まえるものであるとするなら、我々は決して我々の運動と変革の領域を、いわゆる「本土」に限定することはできません。不退転の決意と態勢で、沖縄現地に綱領的・組織的有機性を有する組織と運動を建設しようではありませんか。大正年間の沖縄無産青年同盟と旧沖縄同の沖縄―「本土」―世界を貫流する沖縄解放運動の組織的復権の第一歩を、沖縄海洋博粉砕闘争の只中で踏み出していこうではありませんか。海洋博粉砕沖縄―「本土」共闘の結成を、あらゆる怯懦と日和見主義と闘いつつ、「本土」人民をつかんでなさず、現地闘争の激闘を通して実現しようではありませんか。

謝花から徳球へ、徳球から沖縄同へ、我々の結論は鮮明だと思えます。

諸君！ 壮大な沖縄解放運動に、沖縄同の旗の下に、断乎として身を投じ、生命を燃焼させようではないか！ 沖縄同へ、全ての闘う沖縄人民は結集せよ！ 以上を確

認して本集会を終わりたいと思います。どうも有難うございました。（鳴りやまぬ拍手）

## 沖縄月報を読もう

近刊

沖縄月報 第五号

発行者 沖縄月報社

編集者 新里 金福

連絡先 川崎市多摩区上麻生

一一二一六

新里金福方 沖縄月報社

## 編集後記

十・二五、三〇の関西・関東謝花祭を圧倒的に打ち抜いた後、未曾有の東京決起した沖縄農民一千名と熱をもつて交流した十・二九、十一・三晴海埠頭闘争を展開し、狭山闘争、高松宮訪沖阻止羽田闘争、海洋博とたて続けにたたかいました。この間、会議を重ね、鶴見・川崎の沖縄部落の兄弟姉妹たちにピラを何度も配りステッカーで埋めてたたかったのです。

関西の同志たちも同様に、北恩加の移転問題、沖縄二世・三世に対する「沖縄教育」問題、沖縄人被爆者問題、山口君公判闘争に全力で取り組んでいます。

この様な闘いの合間に、この小冊子が協議され、準備されたのです。当初のプランではこれに政治論文多数を加えて機関誌として発行する予定でしたが、政治論文は合同理論合宿での討論をまつことになったので、変更してこれだけ切り離して発行することになりました。

われわれの運動がめざすものは、世界革命の一環としての沖縄解放です。沖縄と沖縄人をおおう「沖縄疎外」からの脱却です。

新しい方向を展望する運動は、それに見合った思想と人間を求めます。このことを、日々痛感せざるを得ません。金福氏が講演の中でも指摘されている様に、われわれ沖縄人の主体性は「歴史的」にその最も大事な所から魂を抜き去られています。沖縄解放を闘うわれわれとて同化攻撃から自由ではありません。この闘いの中で、謝花から徳球から旧マル同から批判的に学び、摂取しながら、どんなに激痛が伴おうと、大日本人の仮面をひっぺがしわれわれの素顔をとりもどさねばなりません。われわれは闘うことを宣言します。沖縄解放の大義に光あれ！

編集員 関東―池宮城・宮良・真栄田・上野・仲村・平良

関西―山城・比嘉・嘉陽・嘉陽・宮里

沖繩・差別を碎け

発行者 関西沖繩解放同盟準備会

関東沖繩解放同盟準備会

編集 関西・関東沖繩同編集局

発行日 一九七三年一月二〇日

連絡先 関西 — 奈良県庁内解同呼出崎浜方

(仮)

TEL 〇四七二(三)二一〇

関東 — 東京都新宿区大京町一三

徳田方(仮)

TEL 〇三(三五)四七八八

定価 二百五十円

